

第3節 第2次調査の遺構と遺物

調査の概要については第Ⅲ章第1節で述べたとおりである。第2次調査区の全体図は第71図に示した。

(1) 住居跡

第2次調査区からは16軒の住居跡が検出された。帰属時期は勝坂Ⅲ式期が2軒、加曾利EⅠ式期が11軒、加曾利EⅡ式期が1軒、加曾利EⅢ式期が1軒、後期の加曾利BⅠ式期が1軒である。このうち10号住居跡、13号住居跡は入れ子状で検出されている。

1号住居跡（第72・73図、第14表）

住居跡はC7・C8グリッド付近に位置し、台地の肩部に営まれる。南側の一部を2号住居跡と接しており、南西側は調査区域外である。平面形は長楕円形を呈し、調査された部分で長径5.1m、短径3.5m、深さ0.2m、主軸方向はN-60°-Eを指向する。床面はほぼ平坦で、硬く締まっていた。壁溝は南側の壁際で一部検出されている。壁は20cmで、立ち上がりは緩やかである。

覆土は炭化物粒子、焼土粒子を含む褐色土を主体とする。出土遺物は破片資料のみであり、住居跡全域から特に偏りなく出土した。

炉跡は地床炉であり、住居跡の東寄りから検出された。平面形は楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、北西隅にピット1基が位置する。炉跡の覆土は上下2層に分かれ、下層部の黄茶褐色土には焼土ブロックが多く含まれる。規模は長径150cm、短径100cm、深さ14cmを測る。主軸はN-66°-Eを指向する。

ピットは床面から10基が検出されており、そのうちP1～P3が主柱穴の一部として想定される。それぞれの深さはP1-24.4cm、P2-72.0cm、P3-24.7cmである。

出土遺物は加曾利EⅠ式期が主体であり、遺構の帰属時期も同様であると考えられる。なお、縄文時代後期の良好な土器片が覆土中から検出されており、当該期の浅い遺構が覆土を掘り込んでいたと考えられる。

第14表 1号住居跡柱穴計測表

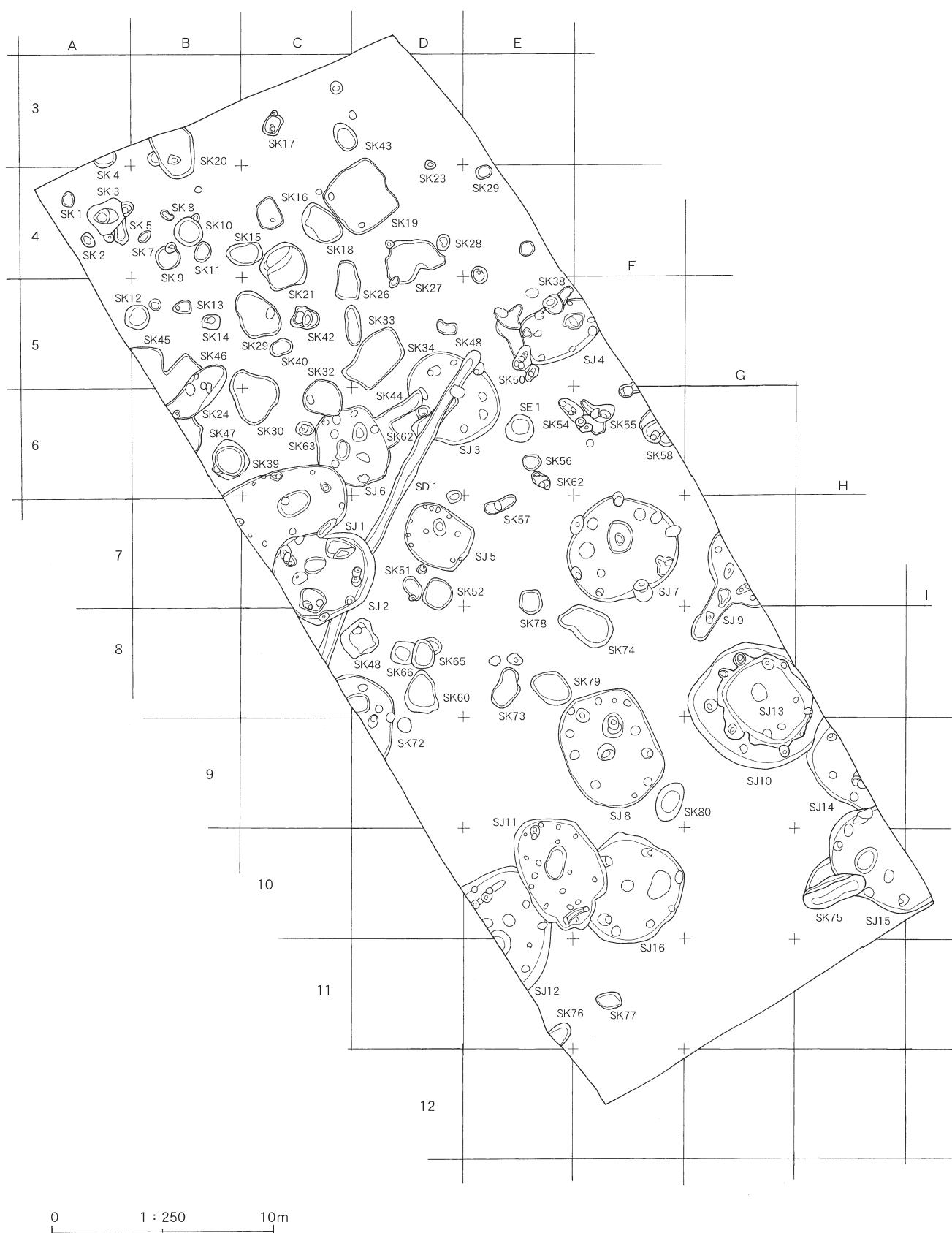
(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	50.0	24.4	P4	19.0	14.2	P7	24.0	57.4	P10	24.0	34.9
P2	60.0	72.0	P5	30.0	50.8	P8	19.0	11.8			
P3	37.0	24.7	P6	32.0	68.9	P9	23.0	14.0			

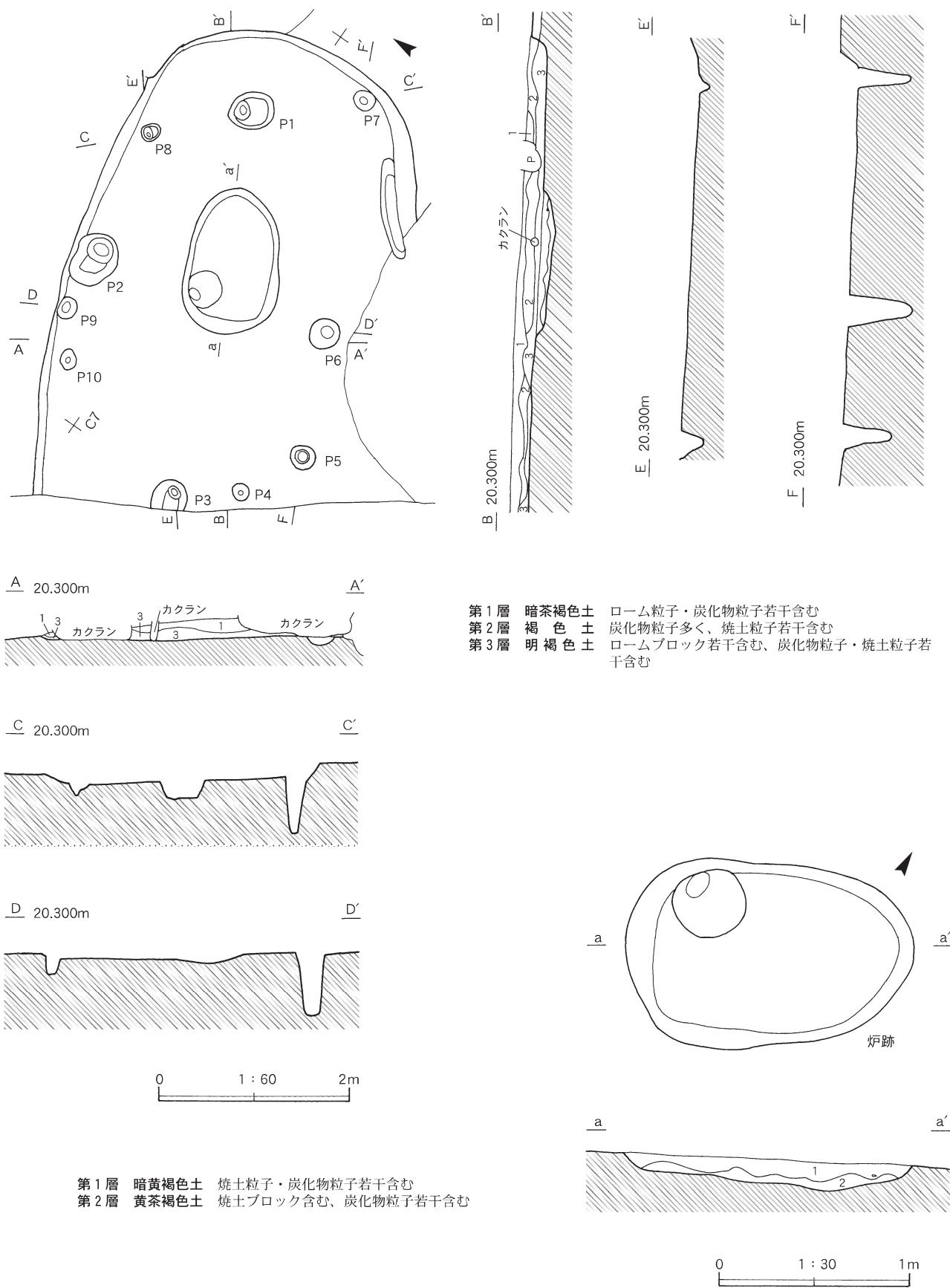
1号住居跡出土土器（第74・75図）

1は深鉢形土器の口縁部で、やや内湾する器形である。口唇部直下に隆帯を廻らせ、2本隆帯による横S字状の主文様と一部を結節して展開する。地文は単節RLの撲糸文である。口縁部上半は横位に転がし、下半は方向を変えて縦位あるいは斜位に施文され、頸部としての意識がうかがえる。胴部との境は2本の隆帯である。復元口径は30.8cmで、胎土には細礫、砂粒、片岩などを含む。色調は外面が明茶褐色、内面は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2～5は勝坂式土器で、隆帯による区画文が描かれる。2は隆帶上に交互の短沈線が施され、隆帯の結節点にはモチーフ内に縦位の3本隆帯を貼付する。区画文内は集合沈線を充填する。3は連続する刻みを有する隆帯で、直下は縦位の条線である。4は隆帶上の刻みが爪形文状である。5は綾杉状の刻みを有する隆帯



第71図 第2次調査区全体図



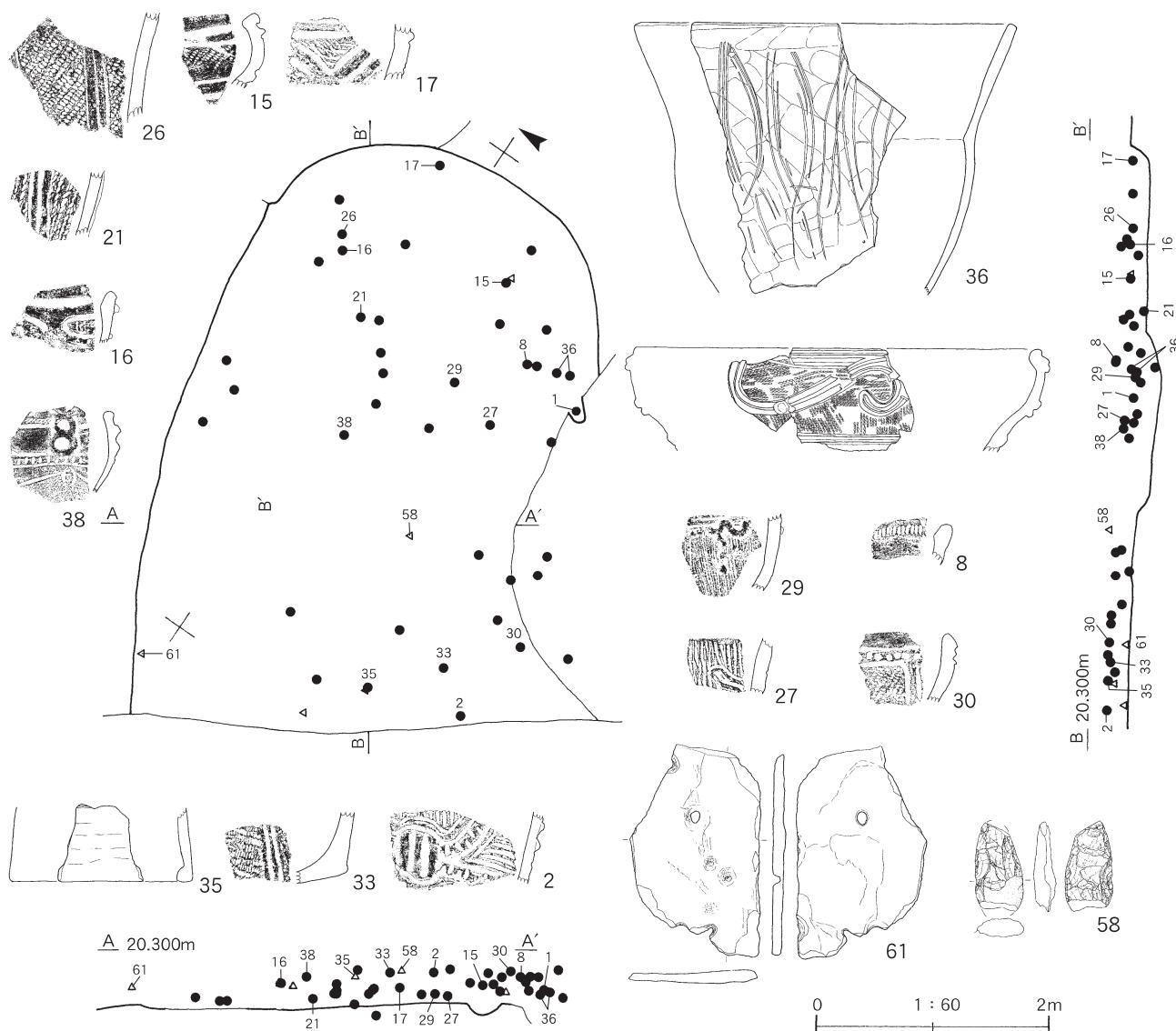
第72図 1号住居跡

である。

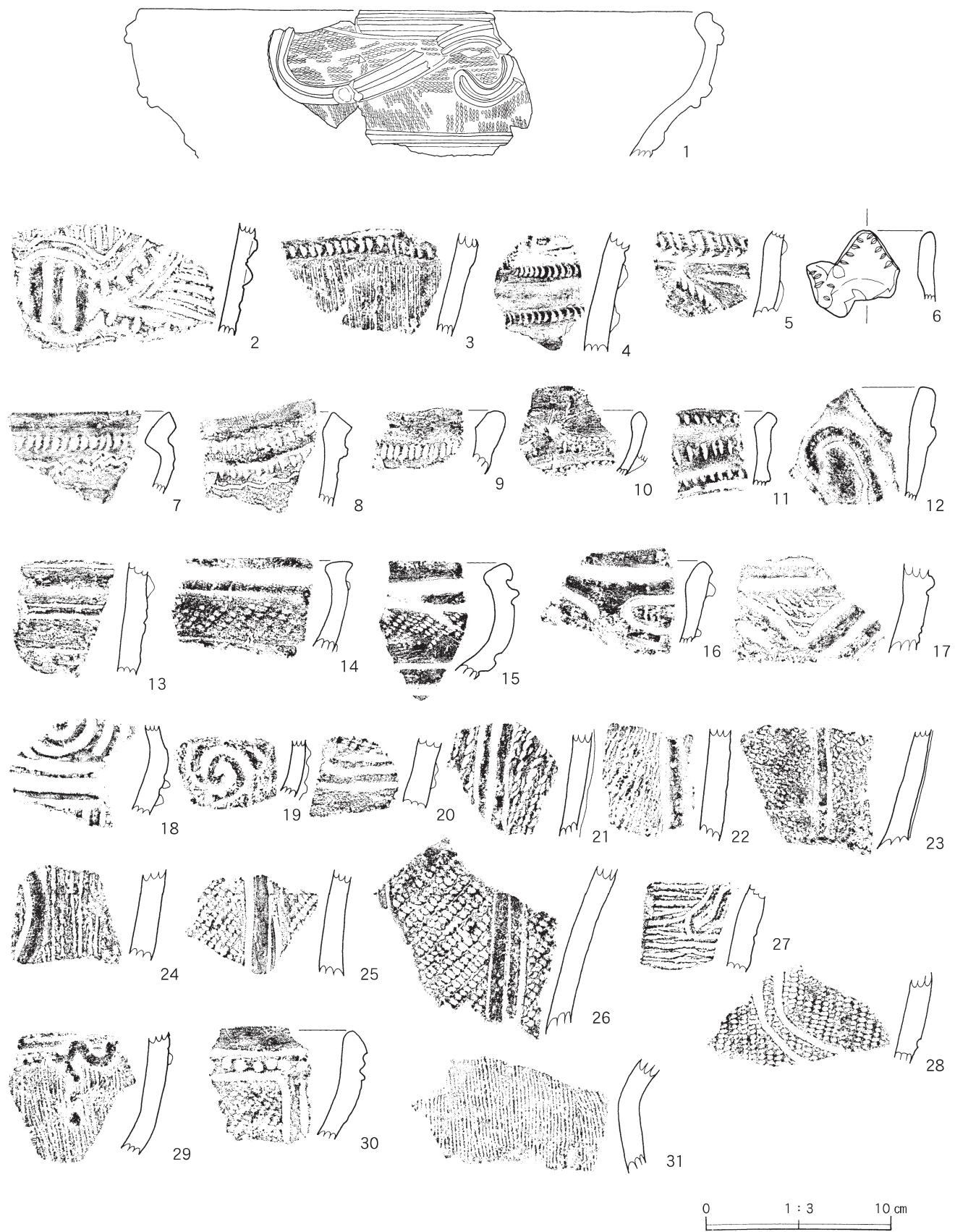
6は口縁部の山形状突起で縁辺に刻みを有し、ここから弧状の隆帯が派生する。

7～9は爪形文が施される口縁部片である。8は2列の隆帯と爪形文及び小波状の沈線が波状口縁に沿って施される。7は平口縁で、爪形文と鋸歯状の沈線である。9は緩い波状口縁で口唇部直下の無文帯と爪形文が平行して横走する。

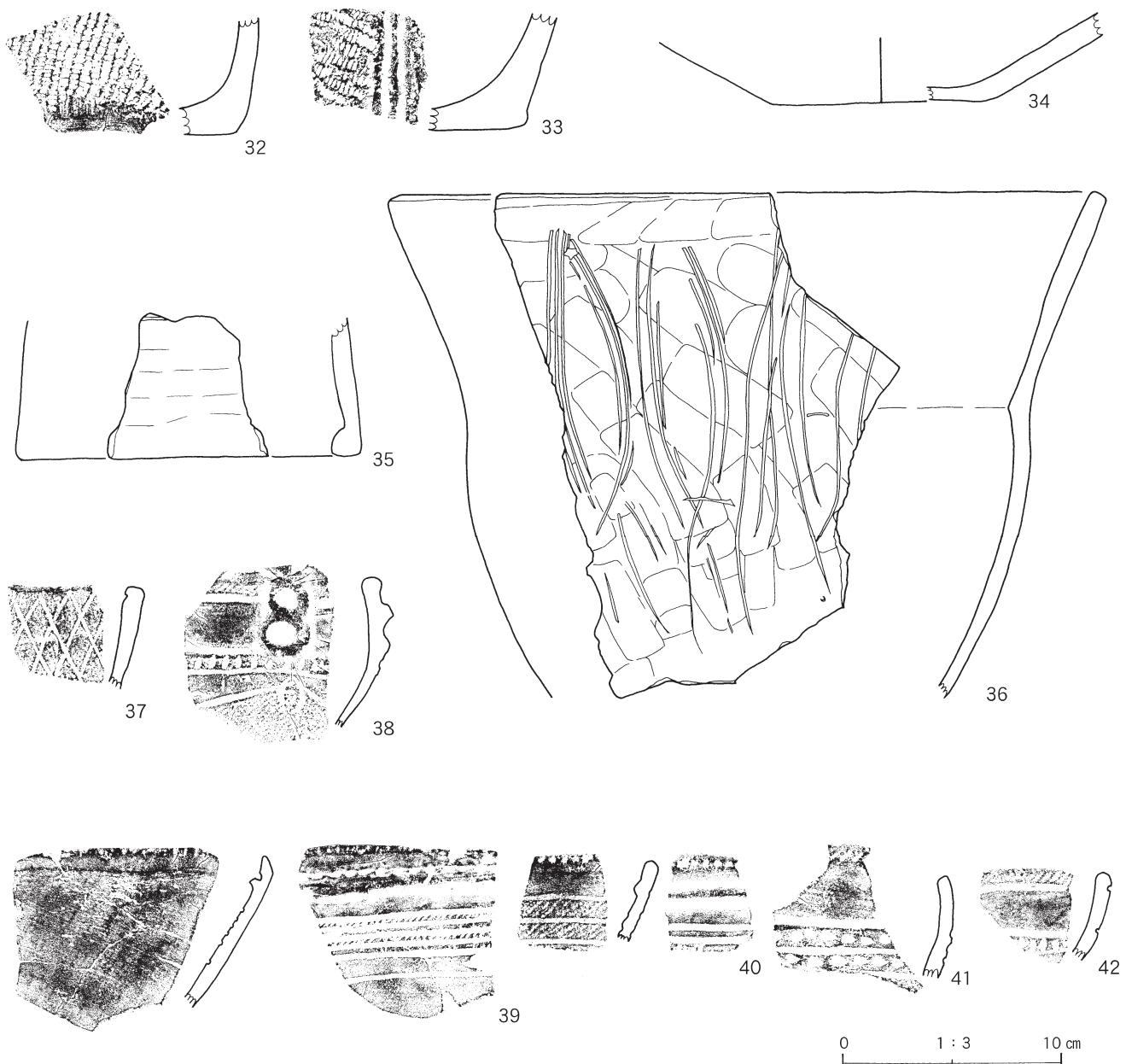
10～12は阿玉台 I b 式と考えられる口縁部片である。10は隆帯に刻みを有し、弧状の角押文が沿う。11は隆帯間に幅の広い爪形文を施す。12は波頂部に刻みがある波状突起である。口唇部直下には弧状の隆帯が垂下する。



第73図 1号住居跡遺物出土状況



第74図 1号住居跡出土遺物（1）



第75図 1号住居跡出土遺物（2）

13は隆帯と半裁竹管による平行沈線を横位に施す。阿玉台II式である。

14～19は加曾利E I式の口縁部片である。14は地文がRLの単節縄文による撚糸文である。15は隆帯により区画文を描き、強く内湾する器形である。16は波状口縁を呈し、隆帯による楕円形区画文を連続させる。17は口唇部を欠損する。2本隆帯による主文様は波状である。18は弧状のモチーフと縦位の集合沈線を2本隆帯が横走して区分する。19は2本隆帯による渦巻文である。

20は頸部無文帶が隆帯により区画される。21～23は胴部片でそれぞれ隆帯による懸垂文が貼付される。23は底部付近の資料である。

24は蛇行隆帯による懸垂文である。1条の沈線が懸垂文に沿って引かれる。

25、26は平行沈線による懸垂文で、25は地文が充填される。26の沈線間は磨り消される。

27は懸垂文から派生する沈線文の一部である。28はRLの単節縄文を地文とし、2本の平行沈線で蛇行する懸垂文を描く。

29は深鉢形土器の頸部である。口縁部文様帯を区画する横位の隆帶上に波状する隆帶が貼付され、ここから一部は派生して懸垂文となる。曾利系の土器である。

30は口縁部片でやや内湾する器形である。口唇直下に円形の刺突文列が施され、沈線による区画文が描出される。加曾利EⅡ式であろう。31は深鉢形土器の頸部片で、縦位のr回転による撚糸文を地文としている。加曾利EⅢ式である。

32～34は底部片である。34は浅鉢形土器で、無文で表面はよく磨かれ滑沢を帶びる。

35は器台である。直線的に内傾して立ち上がり、底面は内側に肥厚する。表面は横位のミガキが施される。復元底径は16.1cmである。

36は堀之内I式の深鉢形土器である。底部から内湾しながら立ち上がり頸部で外屈して直線状に口唇部へ達する。文様は多条文が対弧状のモチーフを描き、連続して横位に展開する。表面は粗くヘラ削りされているが、内面は丁寧な横位のミガキで成形される。焼成は良好であり、表裏面とも茶褐色を呈する。復元口径は30cmと大型である。37は堀之内I式の粗製土器で、多条沈線を格子目状に施す。

38は堀之内II式の浅鉢形土器である。「8」字隆帶が口縁部に貼付され、上端部は口唇部へ突起状に突き出している。口唇部直下は横位に沈線が廻り、内部を磨り消し手法により単節縄文を施す。無文帯直下には刻みを有する沈線文が廻り、ここから対弧状の懸垂文と斜状の沈線を描き、区画の内部は単節RLの縄文を施す。

39、40は加曾利BI式の浅鉢形土器である。39は内面に文様帯を有し、外面は無文である。口唇直下に刺突列が廻り、隆帶が胴部文様帯との境を区画する。胴部には平行する沈線を6条施し、沈線間の1段目、3段目に刻みを有する。40は外面に2段の横帶文を有する。

41、42は安行3c式の浅鉢形土器と想定される。41は口唇部に刻みを有し、無文帯直下の横位の沈線文に列点を施す。42は口唇部直下に横帶文を描く。

2号住居跡（第76・77図、第15表）

住居跡はC7グリッドに位置する。西側の一部は調査区外であり、北側の1号住居跡と切りあい関係にある。平面形は円形を呈し、調査範囲で長径4.4m、短径4.1m、深さ0.4mの規模である。主軸はN-73°-Eを指向する。

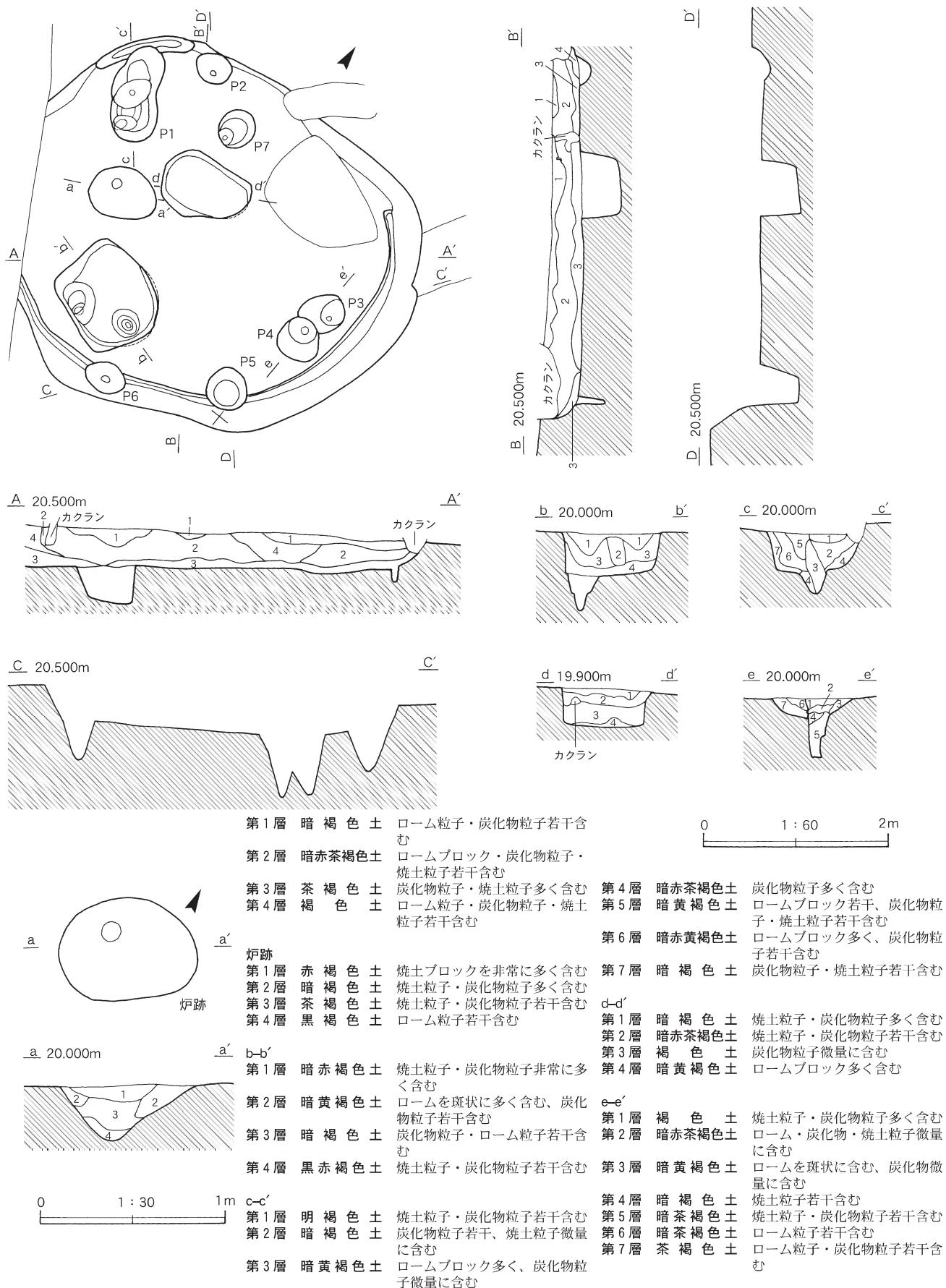
床面はほぼ平坦で、壁溝が住居の南壁際半周と北西部の壁際に検出された。中世の遺構が床面を壊している。また、床面の南側付近に貯蔵穴と考えられる方形の土坑を伴っており、その規模は長径110cm、短径94cm、深さ40cmを測る。土坑の底面には2基のピットが穿たれる。住居の壁はやや急な立ち上がりである。

覆土はローム粒子を多く含む暗茶褐色土が主体である。出土遺物はP7の柱穴上から深鉢形土器の口縁部が出土した他は破片であった。

炉跡は地床炉で、住居の中央東寄りに位置する。規模は長径150cm、短径115cm、深さ60cmを測り、平面形は橢円形を呈する。底面は先鋭し、壁は急な立ち上がりである。覆土は上層に焼土ブロックを多く含んでいた。

ピットは床面から7基が検出されており、そのうちP1～P6が主柱穴として想定される。それぞれの深さはP1-78.5cm、P2-12.4cm、P3-54.9cm、P4-68.3cm、P5-43.5cm、P6-42.6cmである。

床面直上の出土遺物は加曾利EI式が主体であり、住居の帰属時期も同時期と考えられる。



第76図 2号住居跡



第77図 2号住居跡遺物出土状況

第15表 2号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	102.0	78.5	P4	53.0	68.3	P7	44.0	54.9
P2	40.0	12.4	P5	51.0	43.5			
P3	51.0	54.9	P6	52.0	42.6			

2号住居跡出土土器（第78～80図）

1はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部から頸部まで残存する。胴部から外反しながら立ち上がり、口縁部で内湾する器形である。主柱穴のP7直上から検出された。口縁部文様帶は横S字状文を2本隆帯で連続して描き、4単位に展開すると考えられる。横S字状文は口唇直下の隆帯と一部で結合し、口唇上に飛び出して小突起となる。地文は無節1の撚糸文で上半部は横位に転がし、下半部から胴部に至るまでは縦位に施文する。胴部文様帶とは隆帯で画される。胴部には半裁竹管による小波状の沈線が横位に施される。復元口径は30.7cm、残存高は15.2cmである。胎土には片岩の細片、砂粒を含み、雲母片をわずかに混入する。内外面とも2次的な被熱を受けており、器面は荒れている。色調は茶褐色を呈する。

2は小波状の口縁部である。波頂部は肥厚し、ここから矢羽状の刻みを有する隆帯が垂下する。3は口縁部の山形突起で、右側に橢円形の隆帯文が貼付され、刻みを有する隆帯が派生して口縁部に沿う。

4は円盤状の突起で、側縁に刻みを有して円孔を穿つ。

5は山形状突起である。隆帯が口縁に沿って貼付される。また、胴部の区画文内は集合沈線で充填する。

6はわずかに波状口縁となる深鉢形土器の口縁部である。口縁部は直線状に立ち上がり、胴部が膨らむ器形である。縦横の隆帯による区画文を描き、内部は集合沈線により充填する。

7は平縁の深鉢形土器の口縁部片で、無文帶直下に横位の爪形文が描かれる。阿玉台Ⅲ式である。

8は口縁部に刻みを有する隆帯を貼付し、弧状の太い沈線を描く。破損部に角押文の施文がうかがえる。阿玉台Ⅱ式であろう。9は波状口縁直下に幅の広い爪形文が横走する。

10は深鉢形土器の口縁部片で、横位の隆帯と沈線が褶曲文として描かれる。11は胴部に貼付される眼鏡状突起である。両側縁が貫通孔となり、下端には三角形の孔が開けられる。

12は円筒状を呈する深鉢形土器の口縁部である。刻みのある弧状の隆帯が結節して肥厚する。

13～16はパネル文が配される土器群である。いずれのモチーフも半肉彫状で、交互に短沈線を施して文様を描く。勝坂Ⅱ式である。

17は山形状の波状口縁を有する深鉢形土器である。波頂部から襞状の隆帯が垂下する。また、隆帯は粘土の繋ぎ目等を残して意匠化する。18は刻みのある隆帯直下に刻目文を配する。阿玉台Ⅰb式である。

19、20は三角形の断面の隆帯が器面を装飾する深鉢形土器である。19はY字状の懸垂文で、阿玉台Ⅰb式である。

21は懸垂文の隆帯に沿って爪形文を施す。また、平行して条線のモチーフも描く。阿玉台Ⅲ式である。

22はクランク状に推移する隆帯に沿って爪形文を描く。阿玉台Ⅲ式である。

23は2列の角押文がY字状のモチーフを描く。地文はLRの単節縄文で、阿玉台Ⅳ式である。

24は阿玉台式の胴部片で、縦位の多条文によるモチーフで、弧状と波状が交互に配される。

25は加曾利EⅠ式の深鉢形土器を装飾する箱型の中空突起である。両側面には円形、上部は橢円形の貫通孔を有する。

26は山形突起で波頂部内面には沈線により渦巻文が充填される。また、外面は円孔と蕨手状の沈線文が配される。加曾利E I式である。

27は深鉢形土器の把手である。表裏面とも2本隆帯が「8」字状に弧を描く。上下に大きな貫通孔を有する。加曾利E I式である。

28、29は2本隆帯により口縁部文様帶を描く。いずれも横位の撚糸文を地文とする。28は隆帯に沿って沈線を施す。

30は隆帯で主文様を描き、頸部は撚糸文が縦位へと変化する。31は地文がRLの単節縄文で、隆帯に沿つて磨り消し状に沈線を施す。

32は三角形の区画文が主文様であり、周囲を横位の集合沈線が囲む。頸部は縦位の撚糸文である。

33は口縁部片で波状を呈する。口唇部直下の隆帯が立体的な文様に変化する。34、35は横長の三角形の区画文が描かれ、いずれも緩い波状口縁である。

36は縦位の撚糸文が口縁部から胴部に至るまで一様に地文として描かれる深鉢形土器である。隆帯による横位の文様は渦巻文を端部に配する。

37、38は口縁部片である。ともに沈線で密な渦巻文を描く。文様帶は刻みを有する隆帯で区画される。

39は口縁部片で蛇行する隆帯が文様帶を区画する。内部は平行沈線で充填する。

40は断面が三角形の隆帯と半裁竹管による横位の沈線文を平行して弧状に描く。

41は頸部無文帶を有する深鉢形土器で、口縁部の区画内は縦位の集合沈線である。42は頸部無文帶と胴部文様帶の区画がなされず、頸部は横位の粗い磨きを意匠化する。43は口縁部文様帶から弧状の懸垂文が派生する。

44は隆帯によって剣先状のモチーフを描き、隆帯の周囲は沈線状に磨り消される。

45は平行する沈線による懸垂文である。46は頸部と胴部の境を区画する隆帯である。2条の懸垂文が貼付される。

47はRLの単節縄文を地文とする深鉢形土器の胴部片である。雲母細片が胎土に混入され、阿玉台IV式の可能性がある。

48は撚糸文を地文とする深鉢形土器の底部片である。49は底部片で、地文はRLの単節縄文である。

50は浅鉢形土器の口縁部片である。補修孔の貫通を試みているが途中で断念している。

51～53は浅鉢形土器である。51は比較的小型で球胴形である。52は強く胴部が内湾する器形で、口縁部がやや肥厚して内部に緩く屈曲する。53は胴部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が直立状の器形である。

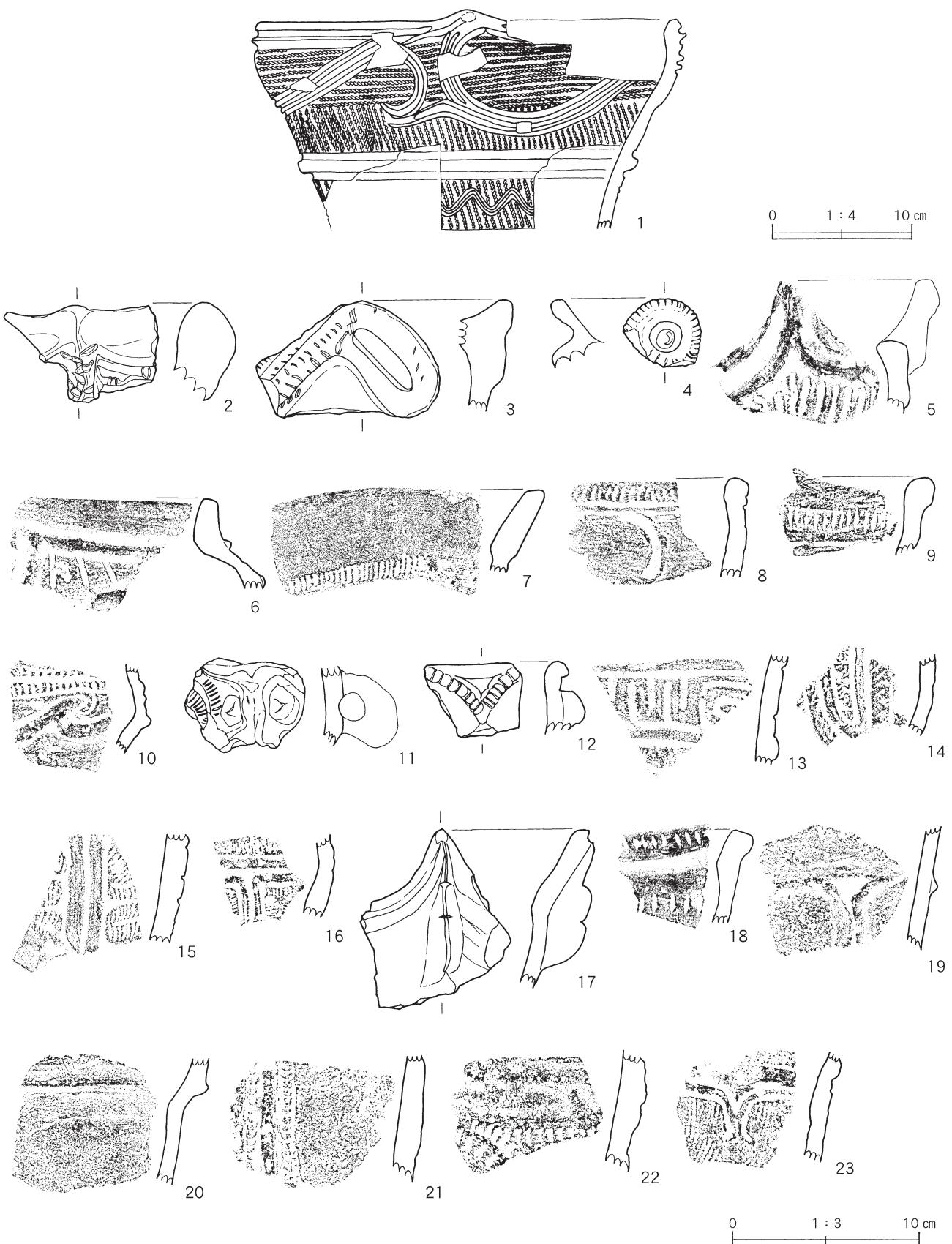
54は浅鉢形土器の底部である。復元底径は10.3cmで大型であると考えられる。55は器台である。脚部は肥厚して内側にやや突出する。無文と考えられるが、上部の割れ口付近に横位の沈線がうかがえる。

56、57は堀之内I式土器の胴部片である。56は蕨手文の一部が沈線で描かれる。57は多条文による斜状のモチーフである。

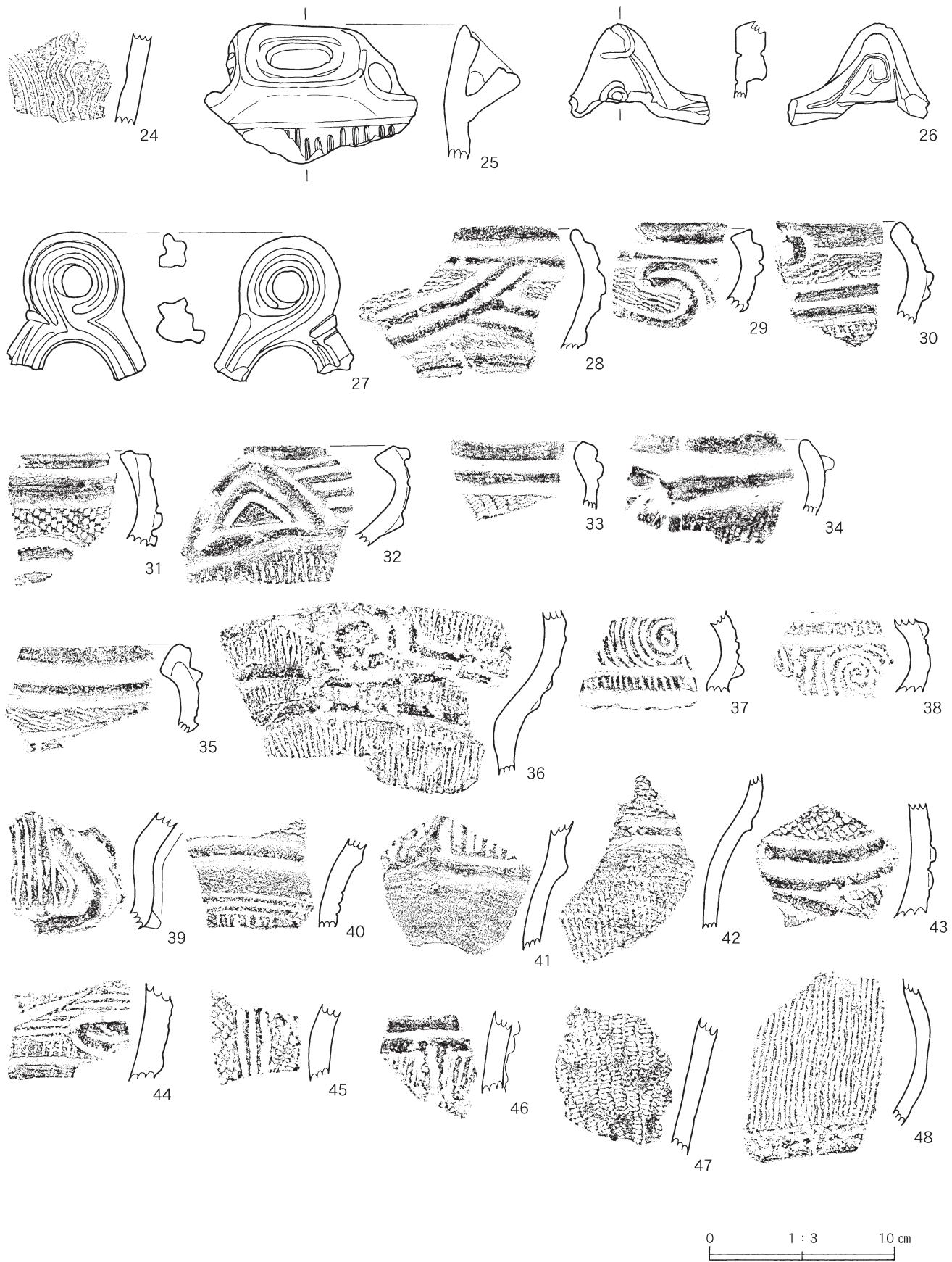
58～61は加曾利B I式である。58は口縁が内湾する浅鉢形土器に比定され、横位の帶縄文を渦巻状の沈線でクランク状に繋ぐ。59は深鉢形土器の口縁部片で平口縁を呈する。口唇直下に帶縄文を配する。60は弧状の沈線が入り組み状に配され、ここから斜状に文様帶が派生する。浅鉢形土器と想定される。

61は深鉢形土器の粗製土器で文様帶を繋ぐクランク文の一部がみられる。

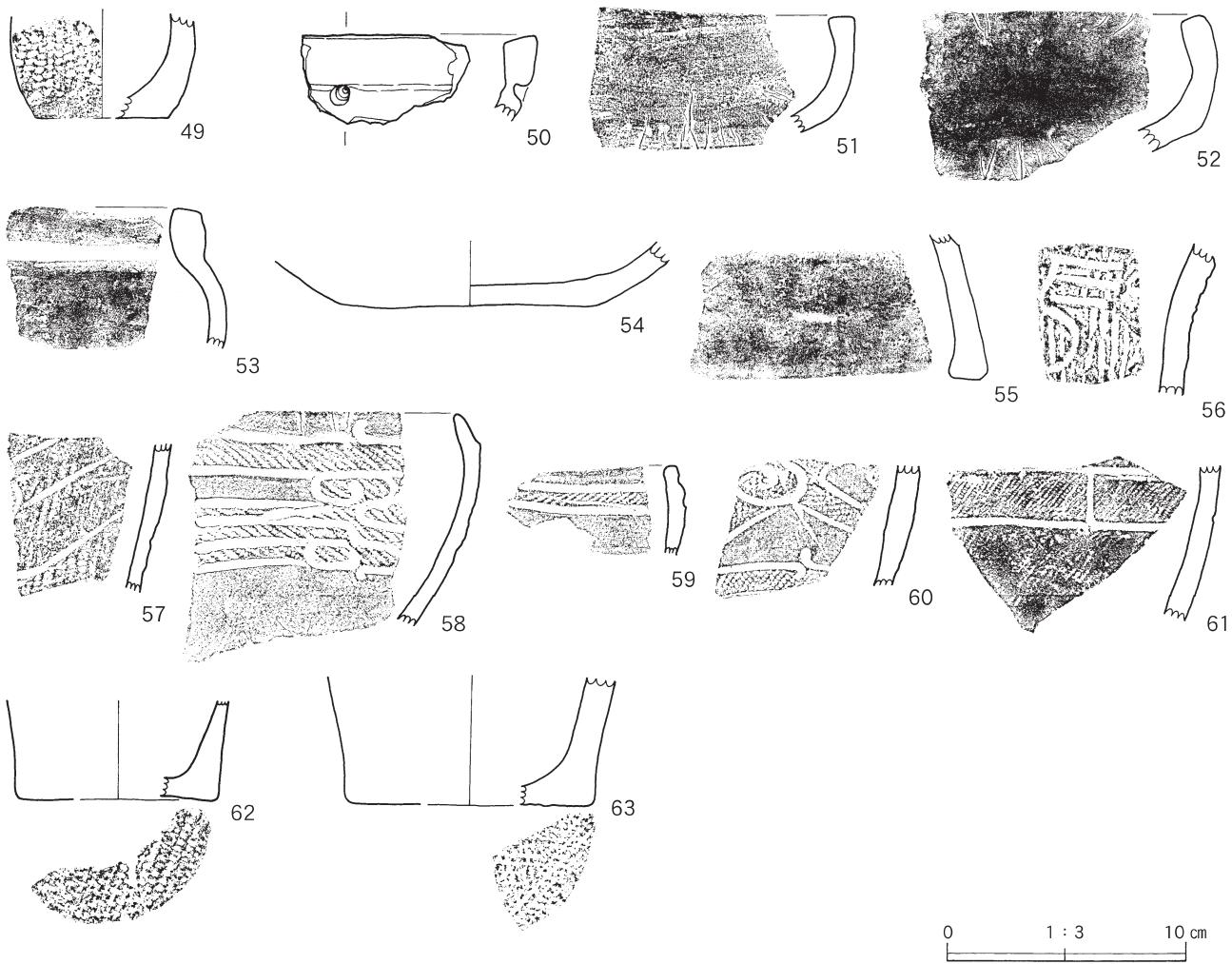
62、63は底部片で、どちらもやや外反しながら口縁部が開く深鉢形土器である。底部に網代圧痕を有する。



第78図 2号住居跡出土遺物（1）



第79図 2号住居跡出土遺物（2）



第80図 2号住居跡出土遺物（3）

3号住居跡（第81・82図、第16表）

住居跡はE6グリッド付近に位置する。中央を中・近世期の溝跡及び土坑に壊されている。平面形はほぼ橢円形を呈し、長径4.4m、短径3.6m、深さは最大で0.25m、最少で0.1mである。主軸方向はN-33°-Eを指向する。

住居跡は台地の肩部に位置するため、壁は北西部が低く南東部が高くなっている。壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦で、壁溝は検出しなかった。

覆土は炭化物粒子、焼土粒子を含む暗茶褐色土を主体とする。出土遺物は赤色の塗彩痕が残る浅鉢形土器2個体が復元可能であった他、深鉢形土器の大型片が主柱穴であるP5上から検出されている。

ピットは床面から8基が検出されており、そのうちP1-P7が主柱穴と想定される。それぞれの深さはP1-87.6cm、P2-81.0cm、P3-59.3cm、P4-38.7cm、P5-46.5cm、P6-54.5cm、P7-60.6cmである。

炉跡は地床炉で、中央やや北寄りに確認された。平面は橢円形で東側に深さ15cmほどのテラスを有し、炉床面は急激に落ち込む。規模は長径140cm、短径110cm、深さは最深部で95cmを測る。覆土は焼土粒子、焼土ブロックを多く含む赤茶褐色土を主体とする。主軸はN-66°-Wを指向する。

出土した土器は加曾利E I式の新段階に属するものが主体であり、住居跡の帰属も同時期に比定される。

第16表 3号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	70.0	87.6	P4	40.0	38.7	P7	67.0	60.6
P2	44.0	81.0	P5	68.0	46.5	P8	22.0	59.6
P3	50.0	59.3	P6	61.0	54.5			

3号住居跡出土土器（第83・84図）

1は浅鉢形土器である。底部から胴部は直線状に立ち上がり、口縁部で内側へ屈曲する。口縁部は矩形に肥厚し、口唇部は平坦に仕上げられており、赤色の塗彩痕が確認できる。口縁部には隆帶による渦巻文が半肉彫状に描かれる。また胴部へ垂下する弧状の文様も描く。外面は2次的な被熱により荒れているが、内面は滑沢を帯び、丁寧にミガキを施す。胎土には細石、砂粒を含む。色調は表面が茶褐色、裏面は暗茶褐色を呈する。推定口径は約23.6cmである。

2は浅鉢形土器である。口縁部から胴下半部まで残存する。底部から直線的に立ち上がり、胴上半部が最大径となり、頸部は大きく内湾し、口縁部は矩形に肥厚する。復元最大径は40.4cm、残存高は10.8cmである。胎土には細礫、砂粒を多く含む。器面は外面が茶褐色、内面は暗茶褐色で斑点状に赤彩痕が認められる。焼成は良好である。

3は円盤状の突起で周縁に刻みを有する。中央部に円孔を穿ち、隆帶を派生して口縁部に区画文を描き、内部に横位の集合沈線を充填する。4は山形状の突起で、周縁に棒状工具による太い刻みを施す。内面にはRLの単節縄文を配する。5は大型突起の下部であると思われる。中央には貫通孔を穿ち、周囲は粘土を貼り付け肥厚させる。円孔に沿ってLRの単節縄文を充填し、浅い沈線文が円を描く。口縁部との区画は爪形文である。

6は山形状突起の直下に眼鏡状の突起が貼付される。横位の隆帶には刻みが付けられ、周辺は爪形文が沿って区画文を描き、内部は三角押文が充填される。阿玉台Ⅲ式である。

7、8は同一のモチーフを描く。いずれも刻みを有する円形の隆帶が胴部に貼付される。内部は同心円状に沈線文が充填される。区画文の上端は隆帶を撲った表現である。

9は胴部に連続する楕円形区画文を描く。隆帶は刻みをもち、内部は沈線に沿って角押文を充填する。

10は口縁部文様帶が隆帶によって三角形に区画され、頸部に2列の爪形文が横走する。頸部と胴部の境は隆帶が貼付されている。

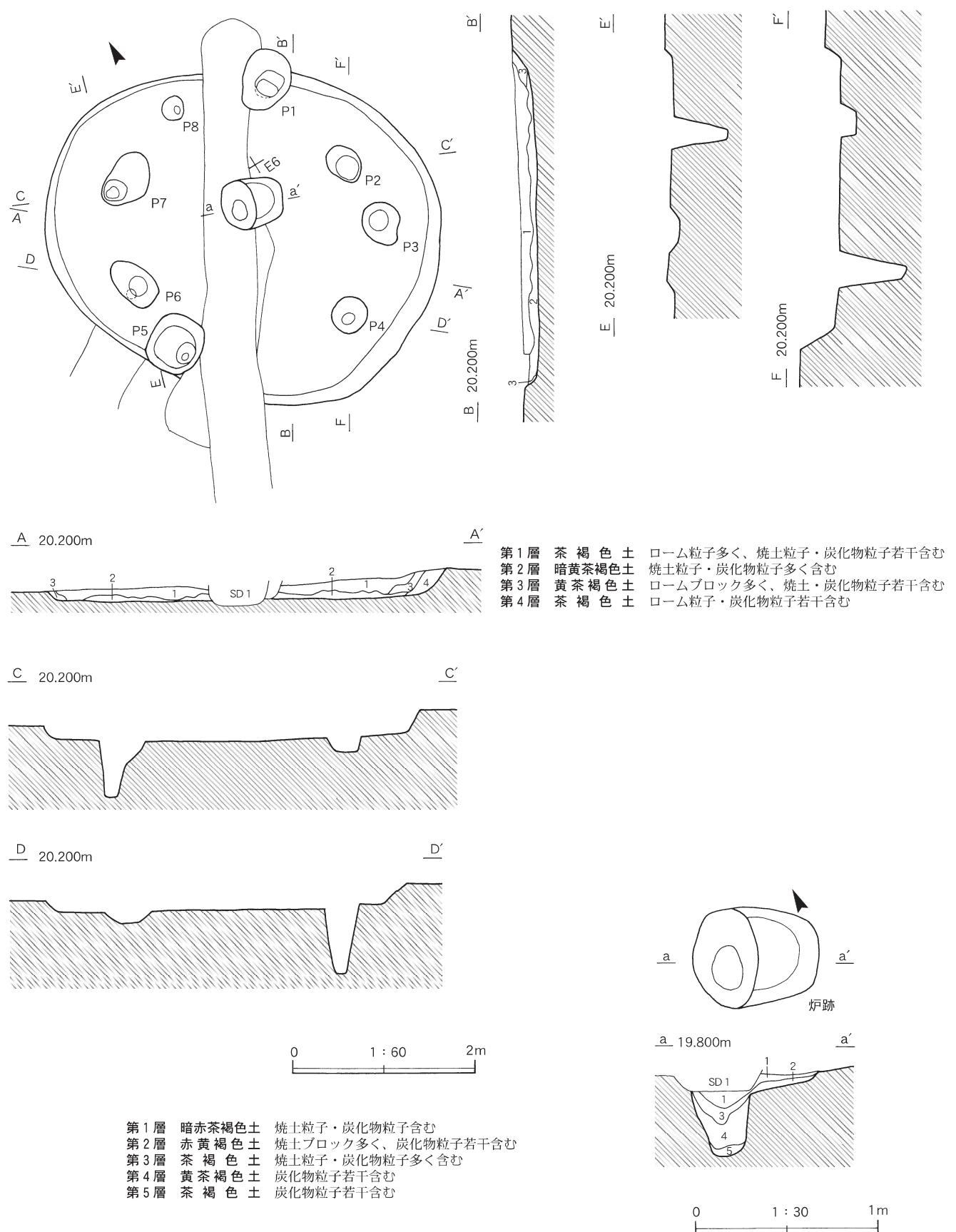
11は円筒形の深鉢形土器の胴部である。細い半裁竹管により縦位に条線を施して地文とする。同様に太い半裁竹管によって三角形状の区画文を描く。12は半裁竹管による区画文を先に描き、内部に条線を充填させる。

13は深鉢形土器の胴部片で、刻みを有する隆帶により区画文を描く。下半部にはRLの単節縄文を施す。

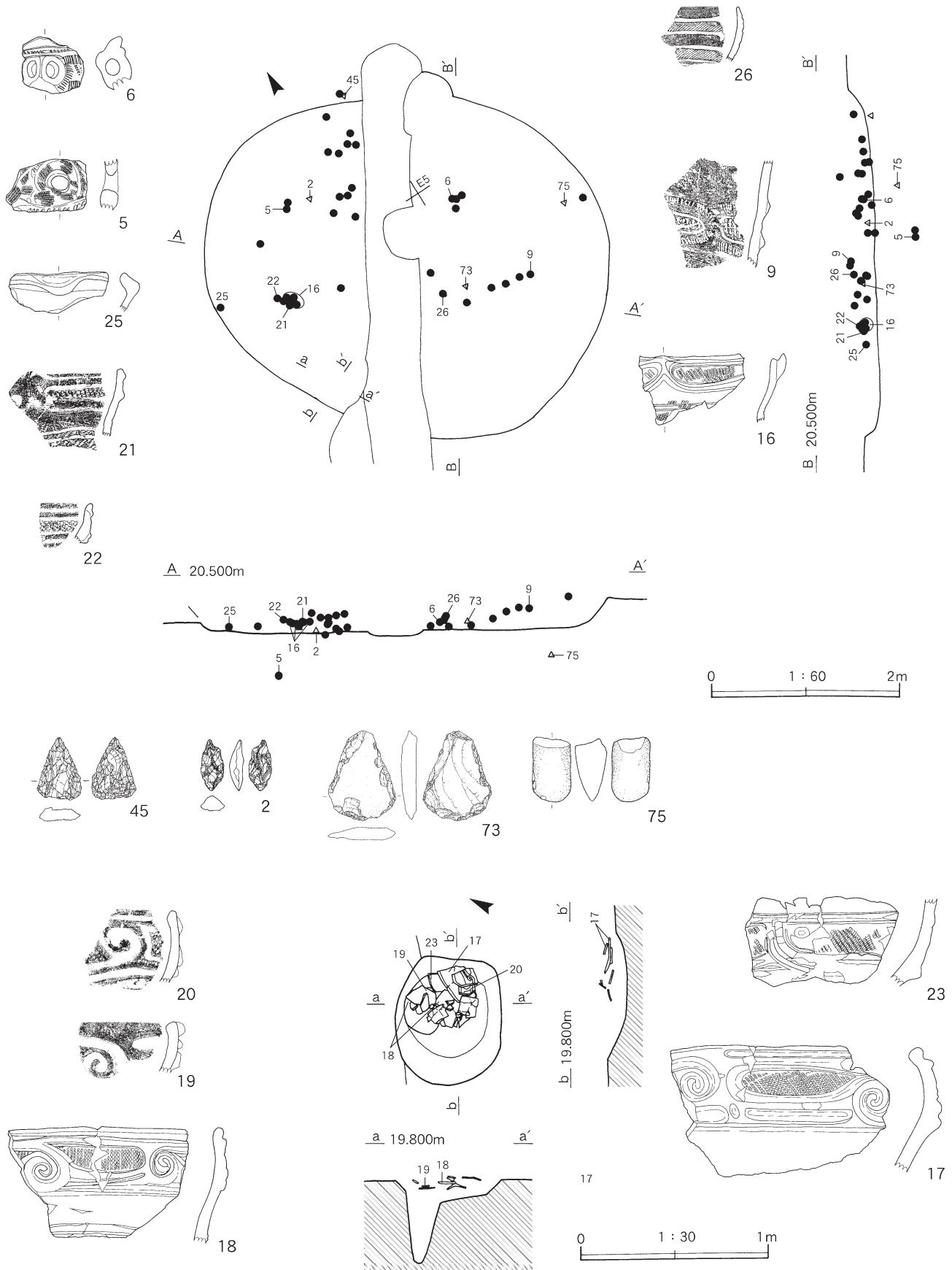
14は阿玉台Ⅲ式の山形状突起である。波頂部から押圧痕のある隆帶が垂下し、爪形文が沿う。一部は隆帶から派生して弧状の文様を描く。15は平口縁の深鉢形土器である。口唇直下に楕円形状の区画文を描出する。内部は波状の有節沈線文を施す。阿玉台Ⅱ式である。

16は楕円形区画文の結節点が口唇部上へ突出し、小突起となっている。区画文内部の地文はRLの単節縄文である。頸部は地文が磨り消される。頸部と胴部の区画には横位の平行沈線を廻らせる。

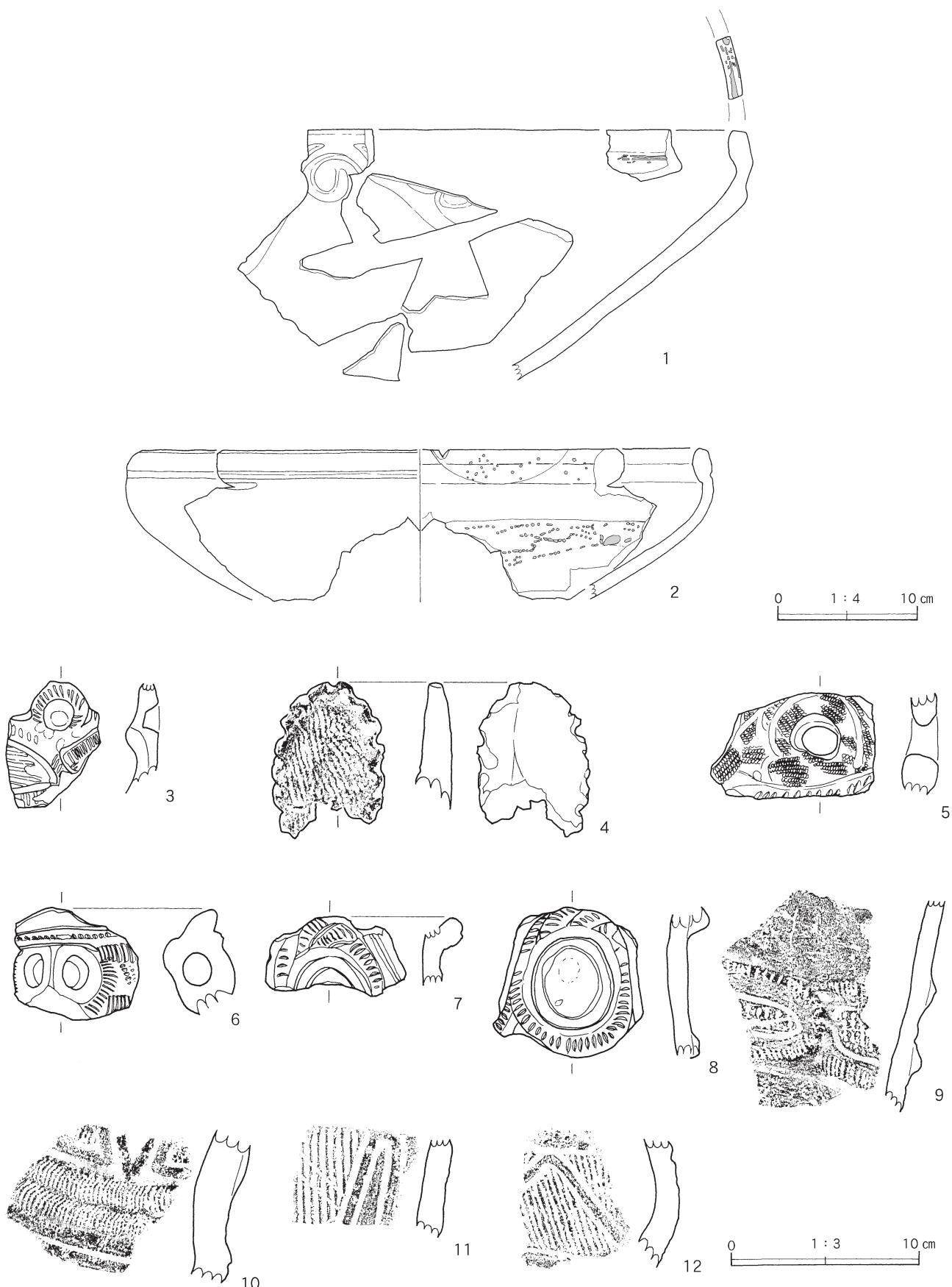
17は平口縁の深鉢形土器である。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部で内湾する器形である。口縁部



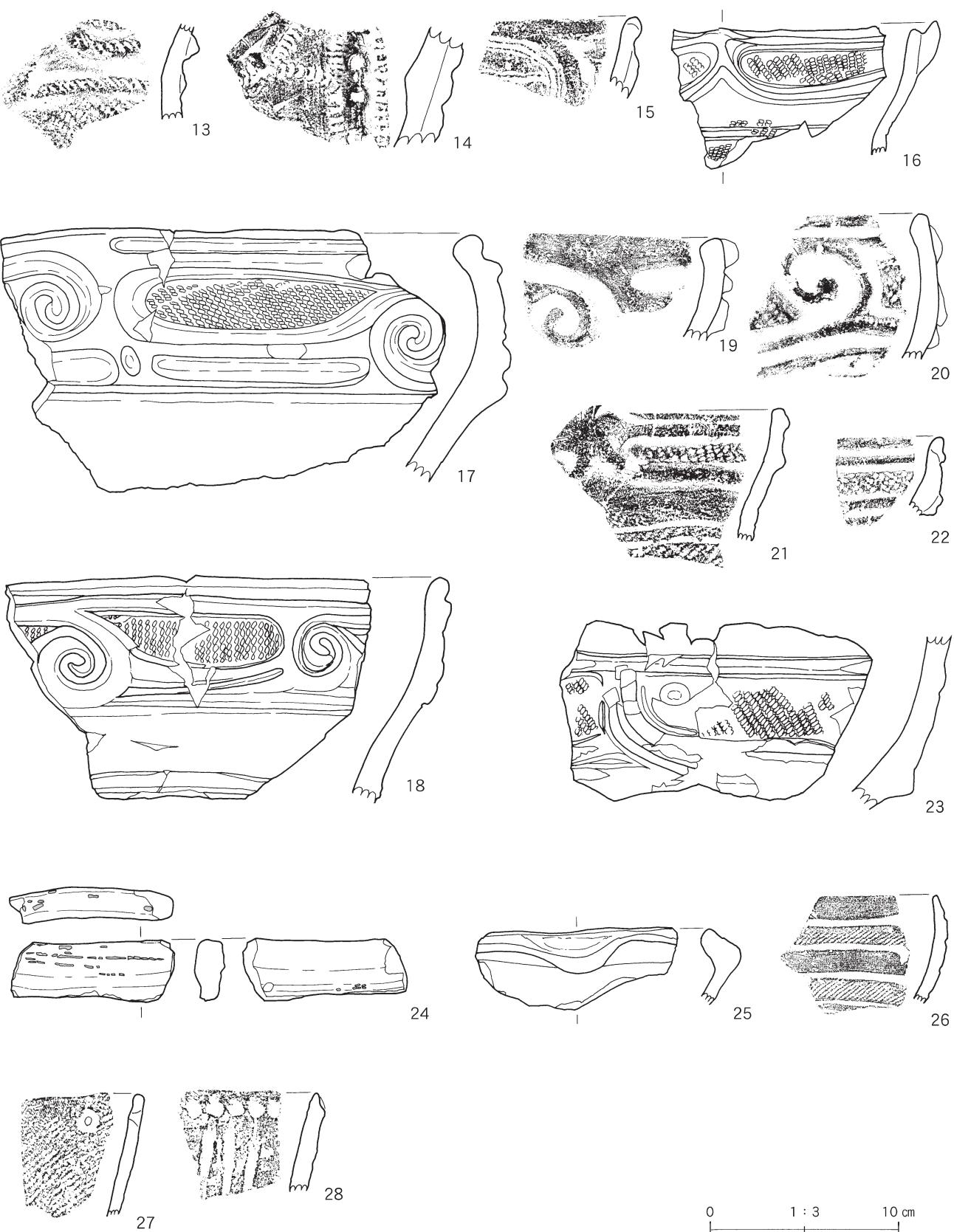
第81図 3号住居跡



第82図 3号住居跡遺物出土状況



第83図 3号住居跡出土遺物（1）



第84図 3号住居跡出土遺物（2）

文様帶は隆帶により橿円形の区画文を描き、ここに渦巻文が結節する。渦巻文は口縁部を廻る隆帶と頸部を区画する隆帶から交互に派生するように描かれるため、上付きで左巻き、下付きで右巻と対向する表現となる。区画文内はRLの単節繩文が施され、頸部は広い無文帶を有する。18も平縁の深鉢形土器で、口縁部の立ち上がりは直線的である。17と同様の文様帶を有する。頸部を区画する隆帶は左の渦巻文から右の渦巻文へ緩く波状を呈しており、繋ぎ弧文状である。地文は縦位の撲糸文である。

19は地文をもたず、太い隆帶による区画文と渦巻文を描く。20は渦巻文を配することで文様帶を区画し、隆帶に沿う沈線で区画文を構成する。21は16と同様の深鉢形土器である。区画文の隆帶が口唇部の小突起に変化する。頸部は無文であり、胴部は単節繩文の地文を施す。22は平行する隆帶による区画文である。23は器面が荒れているため、文様が判然としないが、区画文の端部から渦巻文が派生し、この中に円孔を配していると考えられる。

24は浅鉢形土器の口縁部片である。器面の表裏面及び口唇部に赤彩痕が認められる。25も浅鉢形土器の口縁部で、口唇部が肥厚して胴部の屈曲部へ推移し、突起に変化している。

26は加曾利B I式の深鉢形土器である。平行する帯繩文とこれを連結するクランク文を施す。27・28は堀之内I式の粗製土器と想定され、27は内側の口唇部直下は沈線状である。外側は地文のみで補修孔が表面から貫通する。28は口唇部直下に連続する円孔を施す。

4号住居跡（第85図、第17表）

本住居跡は、E5グリッド付近に位置する。壁と床面の一部を37・50号土坑に壊されており、北東側の一部は調査区域外に延びている。平面形は長橿円形を呈する。住居は小型で、調査された部分で長径3.2m、短径2.5m、深さ0.2mの規模であった。主軸方向はN-64°-Eを指向する。

住居跡は台地の肩部に位置しているため、床面がやや北に傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかで、壁溝は検出しなかった。

覆土は炭化物粒子、焼土粒子を含む茶褐色土が主体である。出土遺物は大型深鉢形土器が炉体土器として検出された他に、小型の深鉢形土器が復元されるなど比較的豊富であった。

ピットは床面から8基が検出されており、そのうちP1～P7が主柱穴として想定される。それぞれの深さはP1-15.2cm、P2-47.0cm、P3-45.4cm、P4-56.4cm、P5-75.9cm、P6-58.3cm、P7-65.8cmである。

炉跡は埋甕炉で、住居の北東寄りに確認され、胴部下半部を欠いた深鉢形土器が埋設されていた。また埋甕の高さを調節するように土器片が底に多数敷設されていた。炉跡は長径110cm、短径70cm、深さは最深部で20cmを測り、平面形は不整橿円形を呈する。床面は凹凸が激しく、覆土は焼土ブロック、炭化物粒子を多く含む赤褐色土が主体である。主軸はN-57°-Eを指向する。

埋甕炉に使用された土器から、住居は加曾利E I式期の新段階に属するものと考えられる。

第17表 4号住居跡柱穴計測表 (単位:cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	31.0	15.2	P4	34.0	56.4	P7	24.0	65.8
P2	42.0	47.0	P5	44.0	75.9	P8	38.0	54.3
P3	30.0	45.4	P6	46.0	58.3			

4号住居跡出土土器（第85・86図）

1は炉体土器として出土した深鉢形土器である。下半部を欠損する。胴部から外反しながら立ち上がり、口縁部はやや内湾し、口唇部はわずかに外屈する。文様帶は渦巻文から派生した隆帶がクランク状に頸部へ移行し、端部に小渦巻文を描く構成を主文様として5単位が展開する。文様間は隆帶による区画文を施し、内部はRLの粗い単節縄文が充填する。頸部は広い無文帶となり、口縁部文様帶とは縦位の短い隆帶で繋がれ、1条の隆帶で区画される。胴部は2条の隆帶が横位に廻り、懸垂文が垂下する。懸垂文は2本の隆帶と2本の沈線が交互に描かれ、それぞれ4単位ずつ廻ると想定される。口径は51cm、残存高は25cmである。胎土には細礫、砂粒が混入する。器面は外面が茶褐色、内面は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は1の炉体土器の下部を支えていた土器片を接合、復元した個体である。底部から口縁部まで残存する。器形はキャリパー形で、底部から内湾しながら立ち上がり、胴部中央が括れ、ここから外反して口縁部で再び内湾する。平口縁で中空突起が付けられる。口縁部文様帶は隆帶により描かれ、橢円形の区画文が6単位廻ると考えられる。また、区画文間は沈線が下から施され、端部をやや円孔状の表現がで施す。区画文の隆帶は口唇部の突起へと変化し、「8」字状である。突起は内外面と左側面に貫通口を有し、前面の貫通口を囲むように渦巻文が沈線によって描かれる。口縁部に移行すると途中で隆帶に変化し、区画文に変化する。口縁部文様帶直下から懸垂文が派生する。懸垂文は2本の平行沈線と1本の蛇行沈線を交互に、それぞれ4単位ずつ描く。地文はLRの単節縄文である。口径は16.5cm、高さは20.5cmで、胎土には細礫、砂粒などを多く含む。内外面とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

3、4は同一個体である。2と同様に炉体土器の支えとなっていた資料である。器形はキャリパー形を呈する深鉢形土器で平口縁である。文様は1と同様に口唇部直下の渦巻文から派生した隆帶がクランク状に移行し、頸部無文帶の上に小渦巻文を描くモチーフである。口縁部は方形の区画文が連続するが、完全に区画することなく端部が解放され、次の文様へ移行する。地文は無節rの撚糸文である。

5は中峠系の土器で外反する波状口縁である。口唇部に1条の沈線が廻って段をなす。波頂部には小渦巻文を配する。口唇直下には隆帶による渦巻文を描出する。

6は波状口縁を呈する深鉢形土器である。口縁部文様帶の区画文は口縁に平行するように文様同士の結節部が波状となる。区画文内は1条の沈線を施す。頸部無文帶を有し、胴部とは沈線により区画する。7は6と同様のモチーフであるが平口縁である。口縁部の区画文内は無文であり、頸部無文帶は地文を磨り消す。胴部はLRの単節縄文を地文とする。

8、9は深鉢形土器の口縁部片である。8の区画文内はRLの単節縄文による撚糸文を縦位に施し、隆帶に沿う沈線で磨り消される。9は隆帶による区画文である。

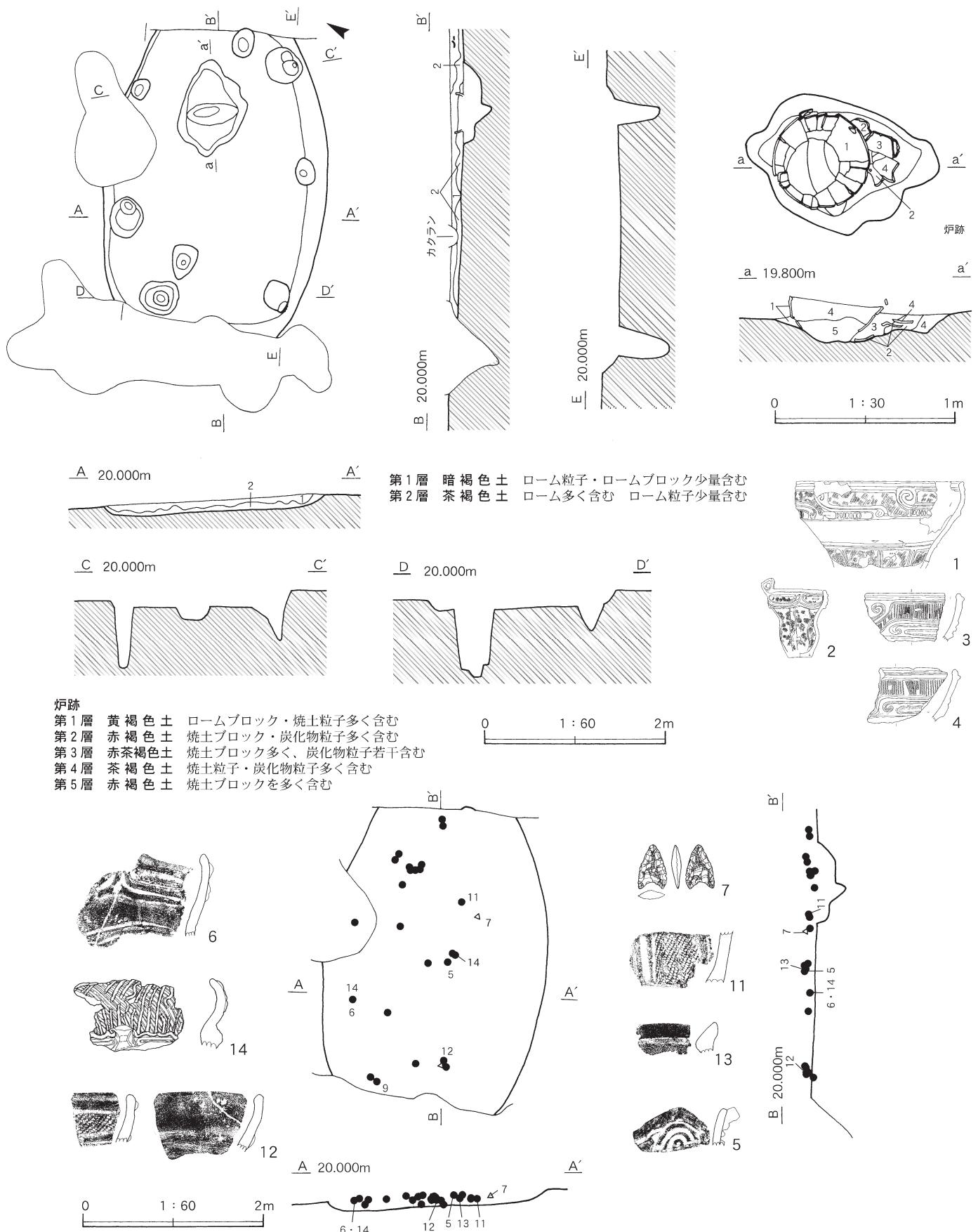
10は頸部と胴部を区画する隆帶から2本隆帶の蛇行懸垂文が派生している。地文は撚糸文である。11は深鉢形土器の底部付近の資料で平行する2本隆帶の懸垂文を描く。

12、13は浅鉢形土器の口縁部片で、いずれも無文である。12は口縁部と胴部の境が隆帶状に張り出し稜としている。13は口縁部が外反する器形である。

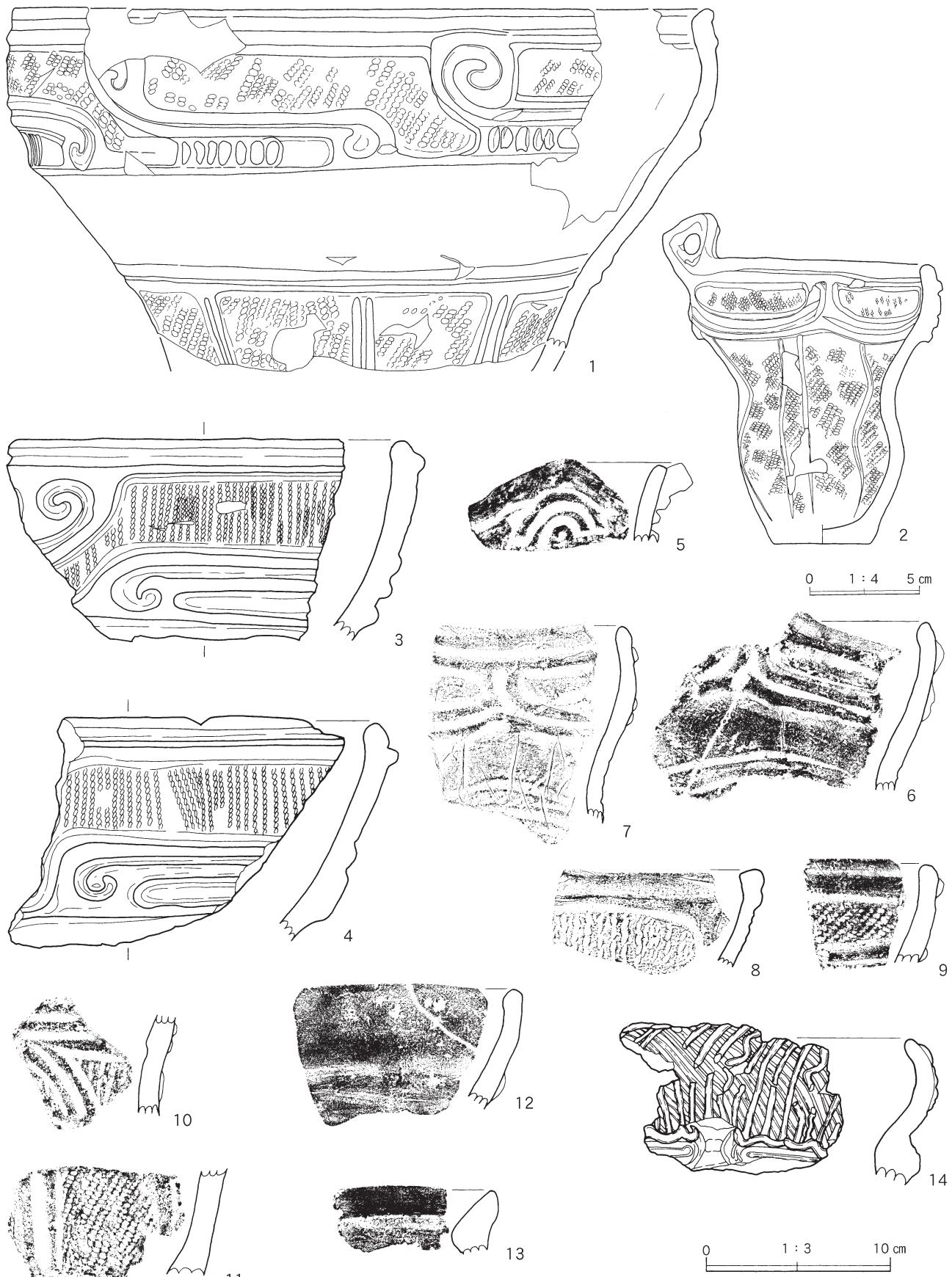
14は曾利系の深鉢形土器で、大きく内湾して端部が先鋭する口縁部である。文様は斜行文が施され、その上を細い粘土紐をクロスさせて貼付させる。頸部との屈曲部は横位の粘土紐と矩形の突起と結節する。

5号住居跡（第87図、第18表）

住居跡はD7グリッドに位置する。平面形は概ね橢円形を呈する。住居は小型で、その規模は長径3.2m、短径2.6m、深さ0.2mであった。主軸はN-54°-Wを指向する。床面はほぼ平坦で、壁はやや急な立ち上



第85図 4号居住跡・同遺物出土状況



第86図 4号住居跡出土遺物

がりである。

覆土はロームブロックを多く含む暗茶褐色土が主体である。出土遺物は炉体土器が検出された他は破片資料で出土量も多くはなかった。

炉跡は埋甕炉で下半部を欠いた深鉢形土器が埋設されており、住居跡の北寄りで検出された。平面形は橢円形を呈し、床面はやや凹凸が残され、壁は斜めに緩やかな立ち上がりである。規模は長径80cm、短径58cm、深さは最大深度が16cmである。覆土は炉体土器中に堆積した覆土では、焼土粒子、ロームブロックを多く含む黄褐色土が主体である。主軸はN-17°-Wを指向する。

床面からはピットが11基検出されており、そのうちP1～P9が主柱穴として想定される。それぞれの深さはP1-25.2cm、P2-28.0cm、P3-24.9cm、P4-16.1cm、P5-30.0cm、P6-34.6cm、P7-34.8cm、P8-34.6cm、P9-39.4cmである。

出土遺物は勝坂式、阿玉台式土器が中心で、炉体土器は勝坂Ⅲ式に属し、住居の帰属時期も同時期に比定される。

第18表 5号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	22.0	25.2	P4	14.0	16.1	P7	23.0	34.8	P10	22.0	25.9
P2	20.0	28.0	P5	25.0	30.0	P8	31.0	34.6	P11	25.0	47.7
P3	17.0	24.9	P6	27.0	34.6	P9	21.0	39.4			

5号住居跡出土土器（第88図）

1は炉体土器である。底部から直線的に立ち上がる深鉢形土器で、口縁部から胴部上半まで復元された。平口縁を呈し口唇部は丸く肥厚し、外面直下は幅の狭い無文帯が廻って凹線が沿い、わずかに無文帯となる。胴部は全面が地文で、RLの単節縄文を転がす。復元口径は29cm、残存高は28cmである。胎土には片岩及び細礫、砂粒が多く含まれる。2次的に被熱しており、部分的に色調は変わるが、概ね内外面とも暗褐色で焼成は良好である。

2はパネル文で構成される円筒形の深鉢土器である。口縁部が矩形に肥厚する。逆U字状のモチーフが半裁竹管により描かれ、浅い横位の条線が充填される。勝坂Ⅱ式である。

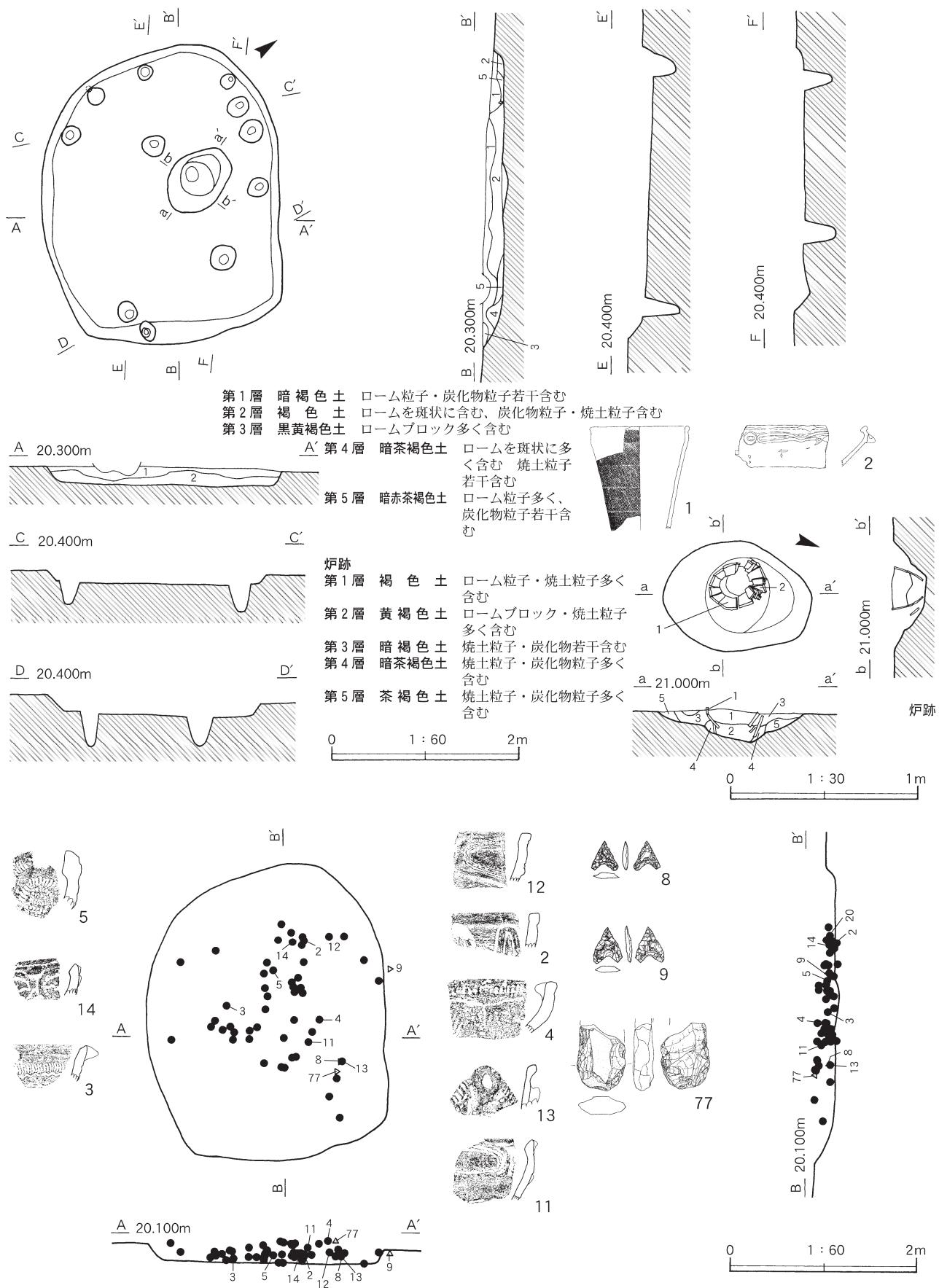
3は口縁部が外側に突出し、これに爪形文と小波状の沈線文が平行する。4は口縁部が内面に突出し、外側には爪形文が横位に沿う。地文は単節縄文である。5は波状口縁で、斜状の隆帯に沿って爪形文を施し、モチーフの内部は渦巻状の角押文を配する。6は円筒形を呈する深鉢形土器の胴部片で、沈線による縦位の文様帯を描く。7は円筒形の深鉢形土器で縦位の隆帯と爪形文、沈線によりモチーフを構成する。8は半裁竹管による区画内の充填文である。これらは勝坂Ⅲ式である。

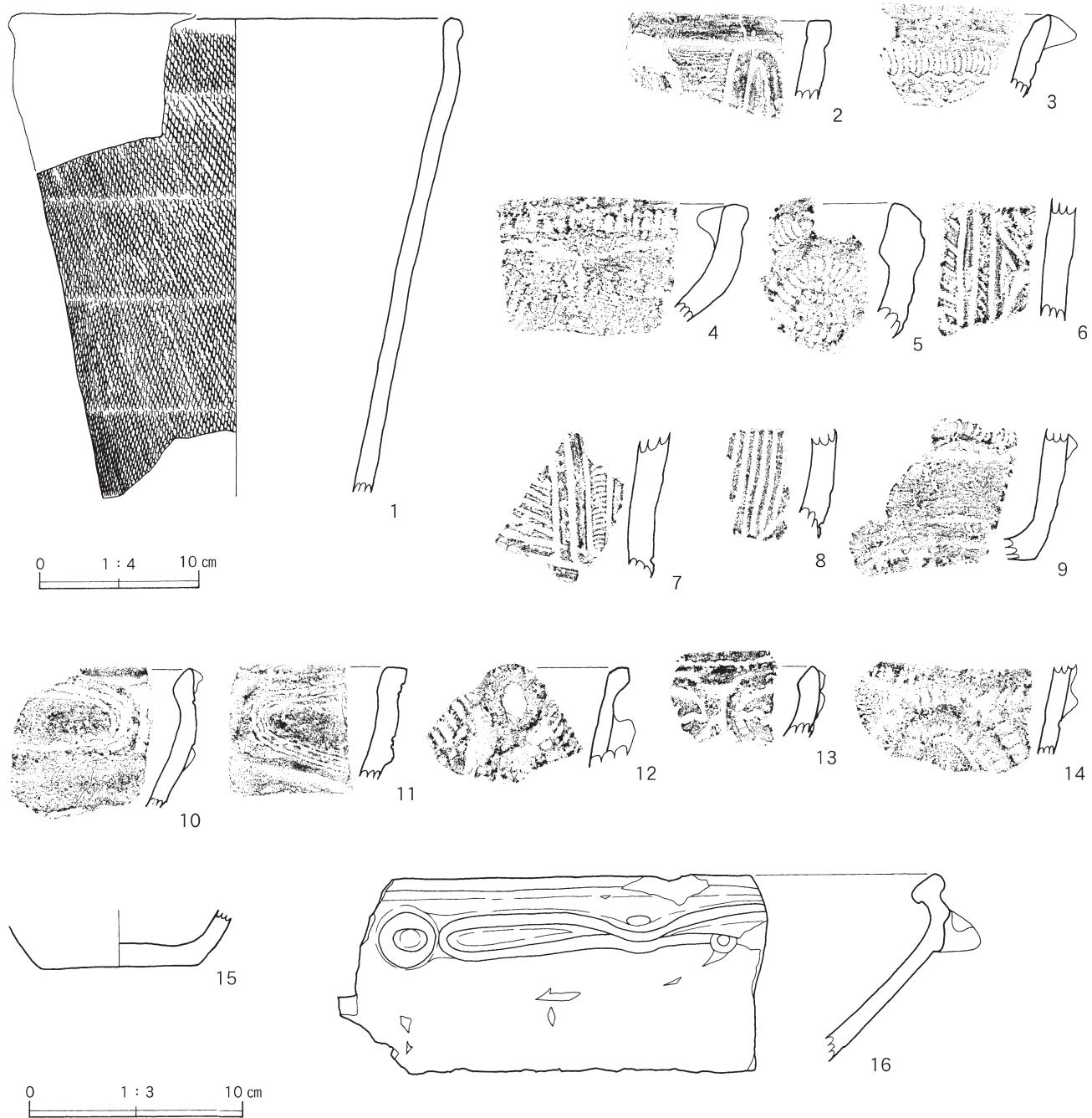
9は底部片で横位の隆帯に爪形文が施される。

10はやや波状を呈する口縁部片である。橢円形の区画文に沿って2列の角押し文を施す。11も同様に隆帯に沿って2列の有節沈線文が描かれる。12は波状口縁の波頂部で橢円形の孔を有する突起から隆帯が垂下する。突起の側縁には刻みを有して角押文を施す。13は対向する橢円形区画文内に一列の角押文と鋸歯状文を描く。これらは阿玉台Ⅱ式である。

14は深鉢形土器の胴部片で円形の隆帯に沿って爪形文を施す。阿玉台Ⅲ式である。

15は深鉢形土器の底部片である。16は勝坂Ⅲ式期の浅鉢形土器である。口唇部はT字状に肥厚して内外面に突出する。口縁部は幅が狭く、文様は円形の隆帯と橢円形の区画文、底状に突出する隆帯文が組み合わ





第88図 5号住居跡出土遺物

さて展開する。モチーフ直下が屈曲部となり、胴部は無文である。突出する隆帯には上面に円孔を配す。補修孔が外から内側へ開けられる。

6号住居跡（第89・90図、第19表）

住居跡は、C6・D6グリッドに位置する。住居南西部の一部を1号住居跡に、東側の一部を44号土坑に、北側を32号土坑によって壊される。

住居の平面形は概ね橢円形を呈し、その規模は長径3.8m、短径3.1m、深さ0.2mである。主軸はN-26°-Wを指向する。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。壁溝は検出しなかった。

覆土は上下2層に分層され、下層はローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子を含む黄茶褐色土であった。出土遺物は少量で、すべてが破片であった。

炉跡は地床炉が2基確認されている。1号炉は床面中央やや北東寄りに検出し、その規模は長径82cm、短径68cm、深さ38cmを測り、橢円形を呈する。断面形は底面から直線状に立ち上がる。覆土は焼土ブロック、炭化物粒子を含む赤褐色土が主体であった。主軸はN-1°-Eを指向する。2号炉は中央やや南西よりに確認された。平面形は橢円形を呈し、長径は88cm、短径56cm、深さは8cmと浅かった。床面は平坦で立ち上がりも緩やかである。覆土は焼土粒子、炭化物粒子、ロームブロックを含む茶褐色土が主体であった。主軸は磁北を指向する。

ピットは床面から8基検出されており、そのうちP1～P6が主柱穴として想定される。それぞれの深さはP1-44.4cm、P2-57.5cm、P3-36.0cm、P4-56.6cm、P5-43.9cm、P6-40.9cmである。

出土した遺物は加曾利E I式期が主体であり、住居跡の帰属時期も当該期に属するものと考えられる。

第19表 6号住居跡柱穴計測表 (単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	32.0	44.4	P4	37.0	56.6	P7	68.0	61.9
P2	49.0	57.5	P5	44.0	43.9	P8	51.0	63.9
P3	35.0	36.0	P6	36.0	40.9			

6号住居跡出土土器（第91図）

1は勝坂Ⅲ式の土器である。刻みを有する隆帯に沿って爪形文と波状沈線が施される。

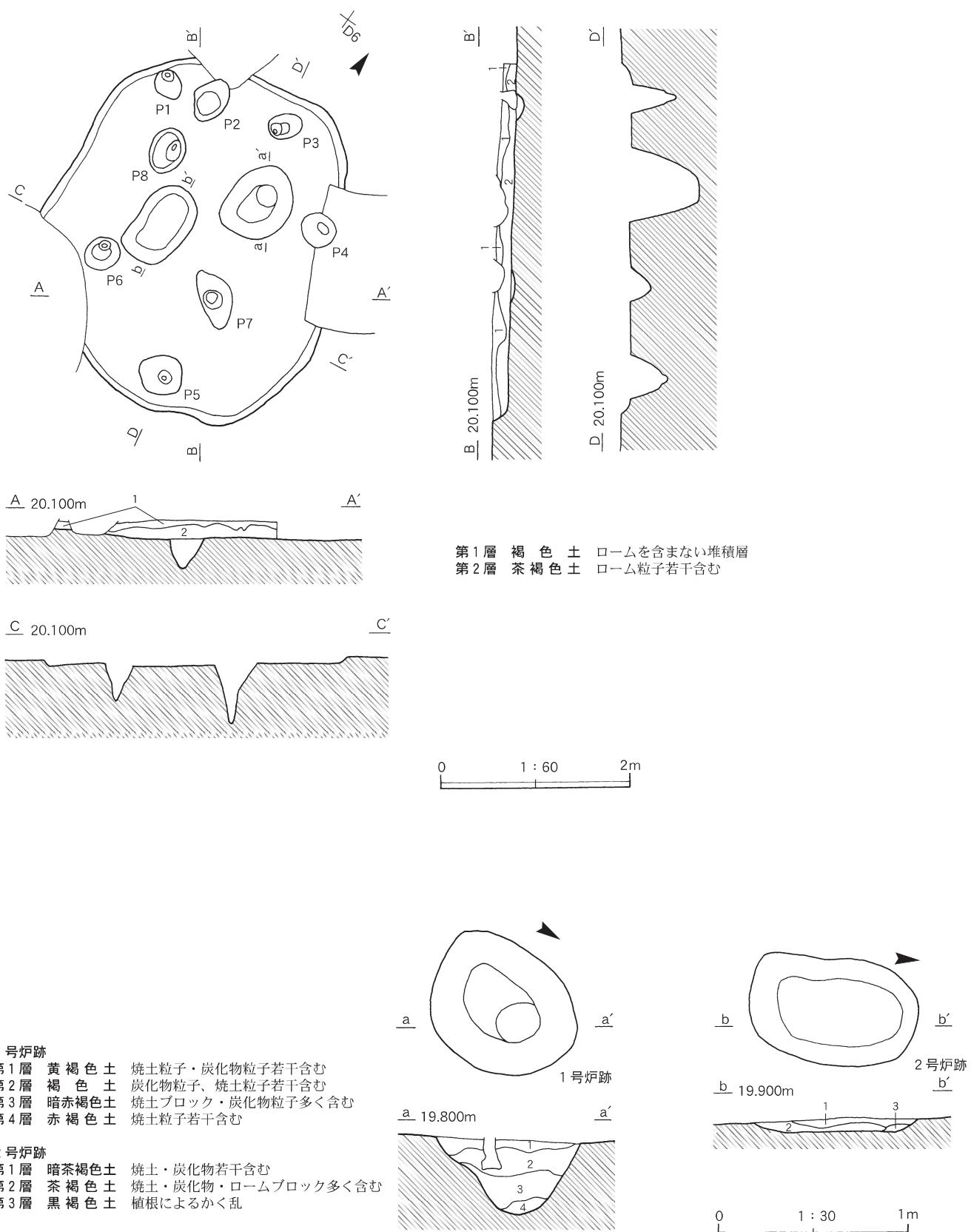
2～6はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。2は橢円形区画文を隆帯によって描く。頸部無文帯を有し、渦巻文のモチーフの下部が突出する。3は口縁部文様帯が方形の区画文で描かれる。頸部には地文の撲糸文と沈線による懸垂文が配される。4は区画文内が半肉彫状に浮き上がり無文で、口縁部文様帯の下に懸垂文を配す。5は撲糸文を地文とする口縁部片である。6は横位の2本隆帯が頸部無文帯と胴部を区画する。地文はRLの单節縄文である。

7は深鉢形土器の底部片である。とびござ目編みの敷物圧痕が残る。

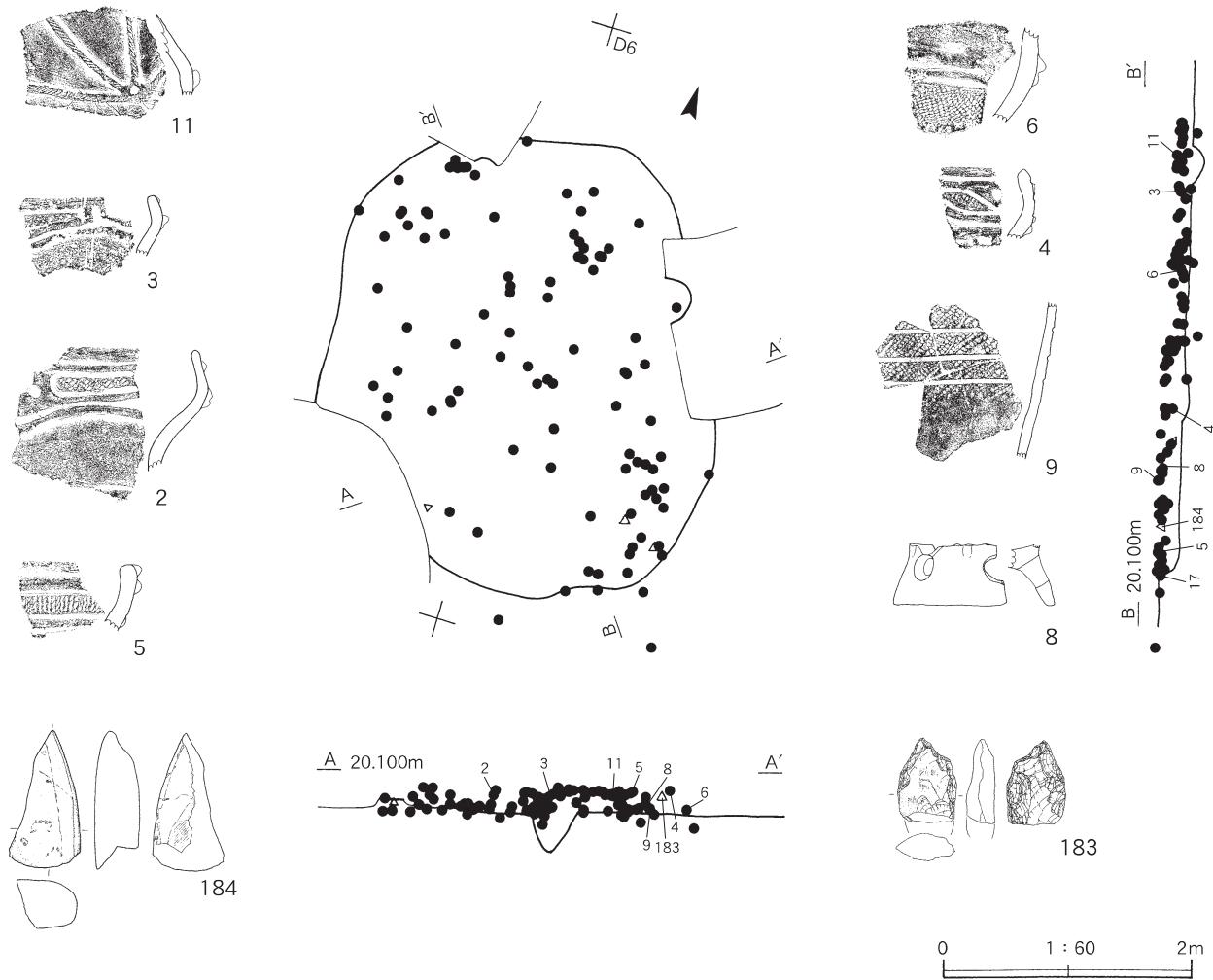
8は器台である。脚部は直線的に「ハ」字状に開く。上面はやや窪んで平坦である。側面に円形の貫通孔が外から内側に向かって複数開けられる。

9、10は加曾利B I式の深鉢形土器で、横位の帶縄文が廻る。

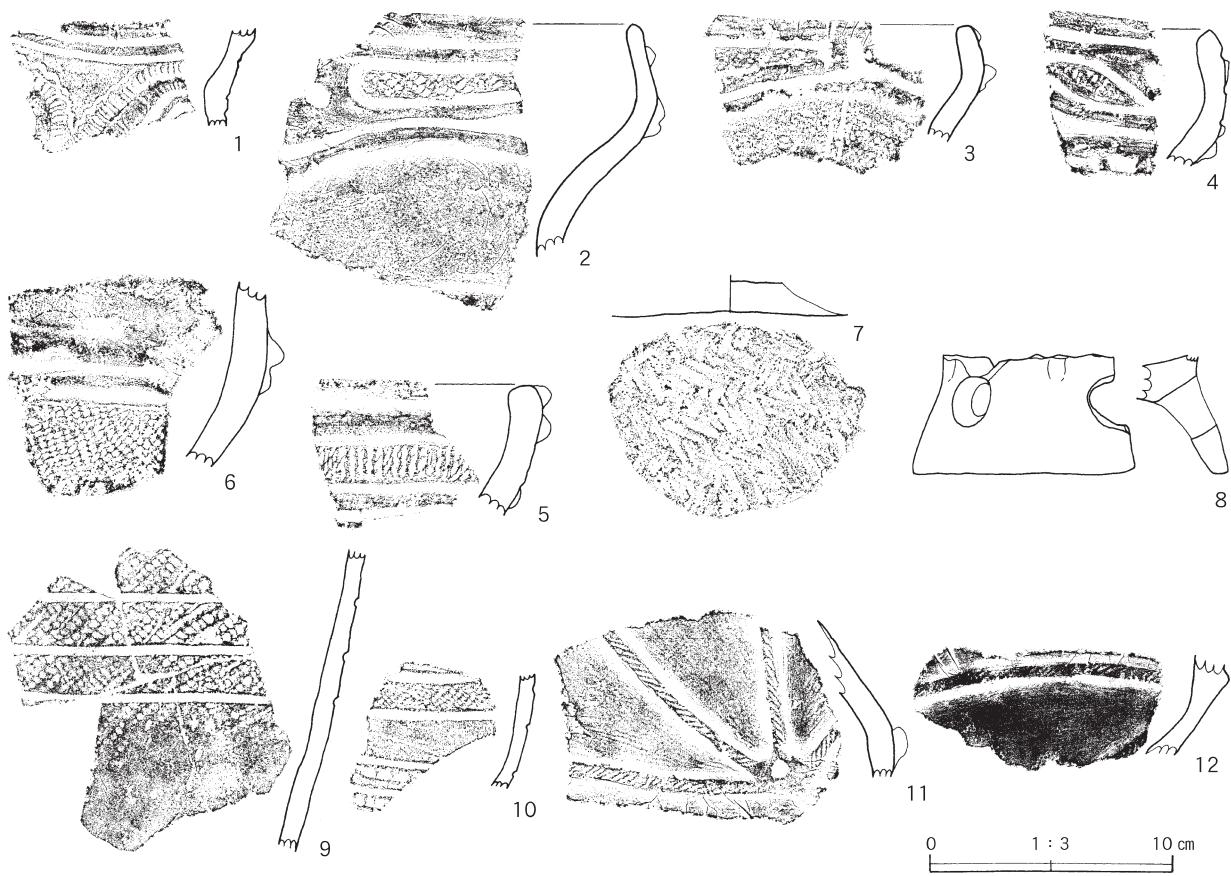
11、12は堀之内Ⅱ式の注口土器の胴部で、同一個体であろう。11は单節縄文が施された隆帯が刺突文を中心放射状に伸びる。



第89図 6号住居跡



第90図 6号住居跡遺物出土状況



第91図 6号住居跡出土遺物

7号住居跡（第92～94図、第20表）

住居跡は、F7グリッドに位置する。住居跡のプランは概ね円形を呈し、長径5.3m、短径4.9m、深さ0.3mの規模である。主軸はN-25°-Wを指向する。床面はほぼ平坦で硬く締まる。住居跡は台地の肩部に位置しているため、北側の壁は低く、南側が高く構築されていた。立ち上がりは緩やかである。壁溝はなく、住居の覆土は焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体とする。

炉跡は埋甕炉で、中央やや北西寄りに位置し、下半部を欠いた深鉢形土器が埋設されていた。規模は長径150cm、短径115cm、深さは最深部で40cmを測り、平面形は楕円形を呈する。炉は中央部が1段低くなり底部は平坦であった。また炉体土器を中心に周辺を浅く平坦に掘り窪めている。壁の立ち上がりはやや急である。主軸は磁北を指向する。覆土は焼土ブロック、炭化物粒子を多く含む赤茶褐色土が主体である。

ピットは床面から13基が検出されている。このうち主柱穴と考えられるものはP1～P6で、南側のP8、P9付近が入口と考えられる。それぞれの深さはP1-79.6cm、P2-73.0cm、P3-102.6cm、P4-93.7cm、P5-86.2cm、P6-74.1cm、P8-97.6cm、P9-86.3cmである。

出土遺物は炉体土器の他、床面直上から浅鉢形土器、深鉢形土器等が出土した。住居跡の帰属時期は勝坂Ⅲ式期である。

第20表 7号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	91.0	79.6	P4	55.0	93.7	P7	31.0	37.7	P10	56.0	82.7	P13	27.0	85.6
P2	64.0	73.0	P5	63.0	86.2	P8	36.0	97.6	P11	50.0	89.5			
P3	76.0	102.6	P6	73.0	74.1	P9	103.0	86.3	P12	36.0	73.3			

7号住居跡出土土器（第95～101図）

1は炉体土器である。土器の立ち上がりは直線状で、口唇部が強く内屈して底状に張り出す。口唇部には突手が備わっていた痕跡がうかがえ、その直下には方形の文様帶が配されるが、その他の口縁部は広い無文帶である。モチーフは刻みを有する隆帶により主文様を描いて区画文とし、内側を集合沈線、三叉文で充填する。隆帶は一部で交互短沈線を施したり、途中で変化して器面外側へらせん状に突出したりする。口径は33.5cm、残存高は24.0cmである。胎土には細礫、砂粒が含まれ、わずかに雲母の混入も認められる。色調は外面が暗茶褐色、内面は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2は深鉢形土器である。口縁部、底部を欠損する。胴部下半は算盤玉状に外側へ張り出す。刻みを有する隆帶を縦位に貼付して文様帶を区画する。隆帶には沈線を沿わせ、途中で短沈線が直交するように派生し、交互に施文する。区画内は弧状の沈線文、三叉文、隆帶による渦巻文等を充填する。現存高は22.0cmである。胎土には片岩の細片、黒雲母などが含まれる。焼成は内外面ともに灰褐色で、焼成は良好である。

3は深鉢形土器の胴部である。胴部上半に隆帶を貼付して渦巻文が施され、これに沿うように沈線による渦巻文を施文する。沈線は途中で三叉文に変化し、文様の展開が一様でない。胴部下半との区画には平行沈線が横位に廻る。モチーフの平行沈線間は交互に角押文を施す。現存高は15.5cmである。胎土には片岩の細片を多く含む。色調は内外面とも茶褐色で焼成はやや不良である。

4は底部が直線的に立ち上がる深鉢形土器である。胴部にはRLの単節縄文が地文として施される。底部付近は地文が磨り消されて無文となる。上部は2本の平行沈線により頸部と区画される。胎土は片岩の細片、砂粒を含み、内外面ともに赤褐色を呈する。焼成は非常に堅緻である。

5は無文で小型の浅鉢形土器である。炉跡南側に逆位に置かれていた。胴部上半に最大径をもち、頸部で屈曲する。口縁部はやや肥厚し、直線的に立ち上がる。口径は15.2cm、高さは11.0cmである。胎土には細礫を含む。器面はよく磨かれ、色調は外面が茶褐色、内面が赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。

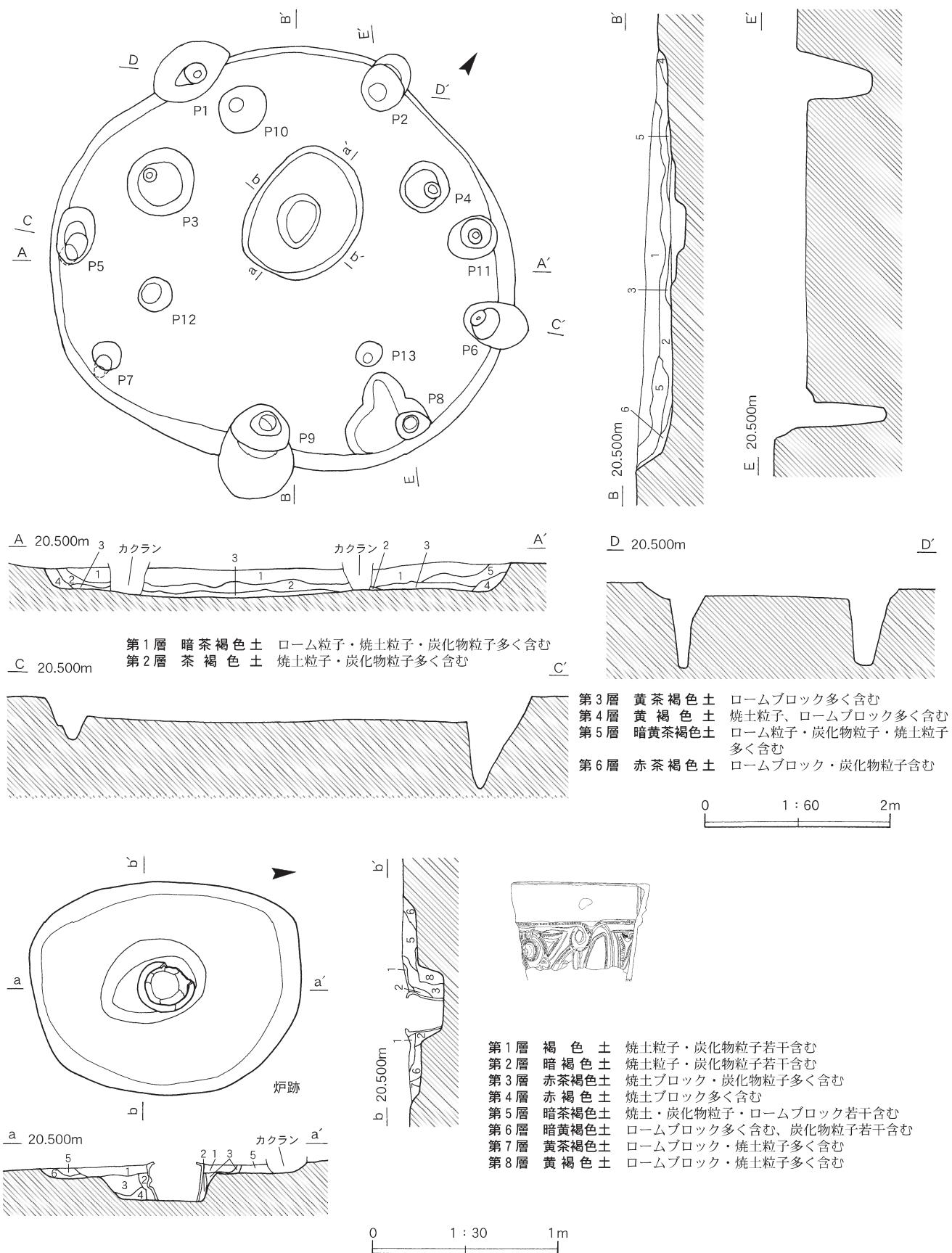
6は底部からわずかに外反しながら立ち上がり、頸部で強く内屈して器面に稜をつくる。口唇部は肥厚して内側へ突出する。胴部はミガキが施され、口唇部、口縁部には丁寧な横位の成形痕が認められた。復元口径は24.6cm、現存高は14.9cmである。胎土には細石、砂粒が混入する。色調は内外面とも明茶褐色で、焼成は良好である。

7は6と同様に胴部がわずかに外反する器形である。口縁部は欠損する。胴部の復元口径は21.0cmで、現存長は8.0cmである。胴部は縦位のミガキを施し、色調は内外面とも茶褐色で、焼成は良好である。

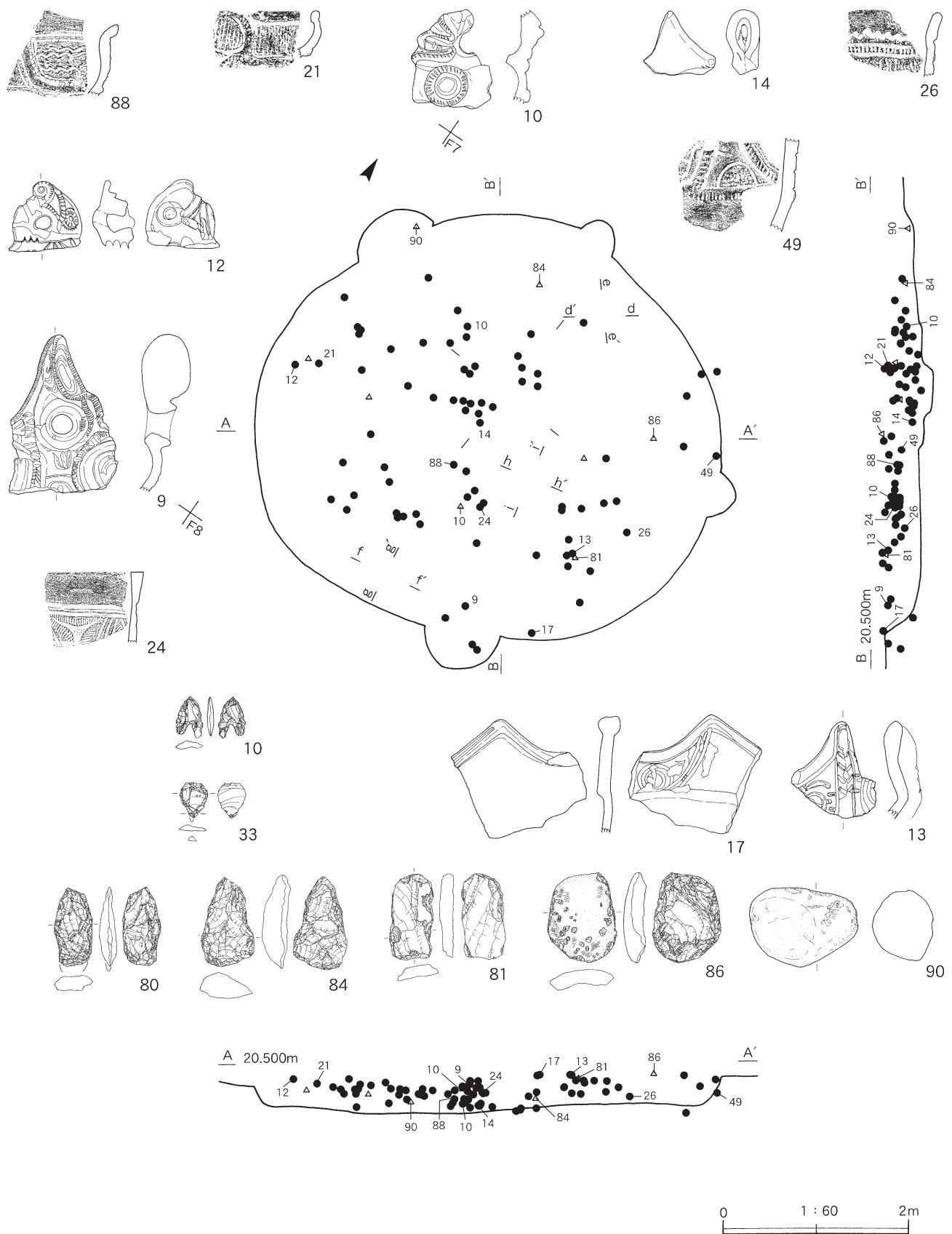
8は胴部上半に最大径があり、頸部が内側へ屈曲する。口縁部はほぼ直立して矩形に肥厚し、稜が横位に廻る。色調は内外面とも茶褐色で焼成は良好である。復元口径は42.5cm、現存高は8.5cmである。

9は山形状の突起から胴部上部に至る破片資料である。突起部はやや左にひねって直立する。左側縁は渦巻状の沈線文と右側縁は円形の窪みを配し、周辺は刻みが付される。刻みはそのまま胴部へ移行して貫通孔と区画文のモチーフとなり、胴部の隆帶は刻みが交互の短沈線へ変化する。

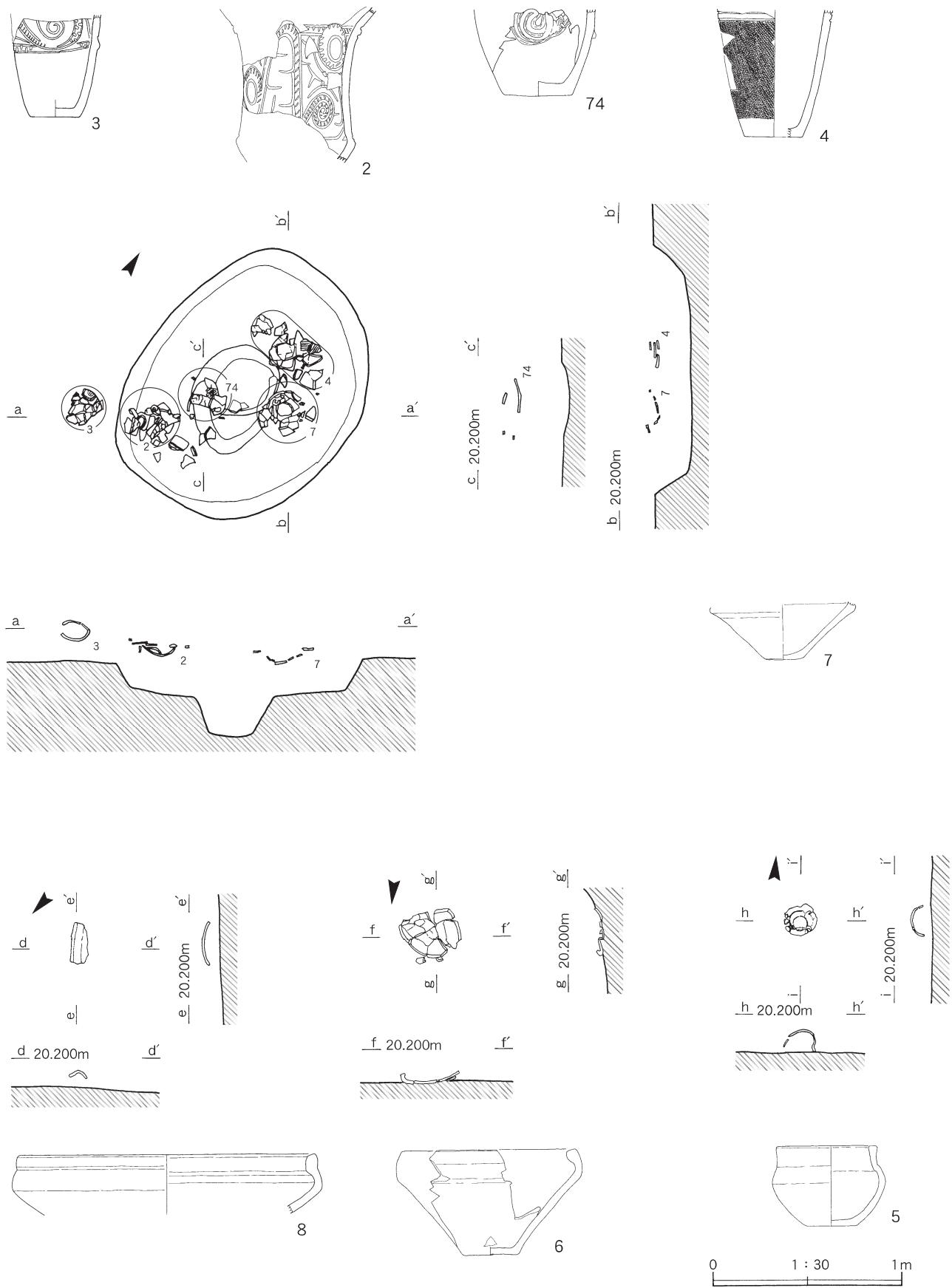
10は山形状の突起でやや外反しながら立ち上がり、貫通孔を有する。波頂部から刻みを付けた隆帶が蛇行



第92図 7号住居跡



第93図 7号居住跡遺物出土状況（1）



第94図 7号居住跡遺物出土状況（2）

して垂下し、胴部の円形隆帯に結節する。

11も山形状の突起で、波頂部から刻みをもつ弧状の隆帯が垂下する。縁辺にも刻みが付され、裏面は円形の窪みを配す。

12は胴張りの中空の突起である。正面は円孔と刻みをもつ円形、弧状の隆帯を貼付する。また、裏面は円形と三角形の孔が隆帯に縁どられる。これらは表面の円孔に貫通する。

13は山形状の突起である。縁辺は肥厚し、波頂部からは交互の短沈線を施した隆帯が垂下する。突起の立ち上がりは直線状で口縁部は内湾する。

14も口縁部に付く山形状の突起で、右側縁に橢円形の窪みをもつ。

15は円盤状の突起で周縁に刻みを有する。中央部には円形の窪みを有し、ここから窪みに沿って沈線が加えられる。

16は山形状の突起である。周縁の一部が左側に突出し、上部に円錐形の小突起が加えられる。正面は円孔と貫通孔が上下に並び、円形あるいは渦巻状に隆帯と角押文で縁どる。裏面は角押文が沿う太い隆帯によって橢円形状の区画を構成し、内部に縦長の三叉文を充填する。

17、18は大型の波状口縁部である。ともに器面は滑沢を帶び、口唇部が肥厚して断面は矩形を呈する。17は内面に稜を有し、波頂部からは2本沈線によるJ字の懸垂文が垂下する。

19~21は刻みをもつ隆帯により文様を区画する。区画内はいずれも集合沈線を充填する。19は円筒形の深鉢形土器である。20は方形の区画が大きく設けられ、21は橢円形区画文に方形の区画文が連続する。

22は矩形に肥厚した口唇直下から集合沈線が垂下する。

23、24は円筒形を呈する深鉢形土器である。ともに断面が矩形を呈し、幅の広い口縁部をもつ。胴部文様帶との区画は沈線を廻らせる。24は爪形文による三叉文を描く。

25は波状口縁を呈する資料で、山形の突起部に沿って爪形文を施し、内部は集合沈線が充填される。

26、27は口縁の屈曲部に鋸歯状の沈線が廻る。26の地文は撚糸文である。

28~30は円筒形を呈する深鉢形土器である。肥厚した隆帯が口縁部を横走し、口唇部には沈線を廻らす。

28は口縁部が波状を呈して突起が付き、ここから懸垂文が派生すると考えられる。29も隆帯が口縁部に一度蛇行して突起へ変化すると想定される。

31は交互刺突文が口唇直下に廻り、胴部に至って強く屈曲する。32は口縁部と頸部の屈曲部に指頭圧状の窪みが連続して隆帯が廻る。33は口唇直下に半裁竹管による蓮華文を施す。34は波状口縁を呈する。外側に口唇部が突出し、下部に爪形文が施される。35はバケツ状を呈する深鉢形土器の口縁部片である。口唇部が内側に突出して庇状である。36は隆帯による区画文内に集合沈線を充填する。

37~50は刻みをもつ隆帯が区画文を構成する。37は文様帶の下端を区画する隆帯である。内部は弧状の沈線文である。38は横位の隆帯には交互刺突文が施され、ここから橢円形に区画文が垂下する。39は方形の区画文である。41は横位の隆帯が文様を区画する。42は斜位の文様帶を描く。爪形文内には三叉文が配される。43は隆帯に沈線が沿う。44は斜位の隆帯が横位に区画文を展開する。45は隆帯が弧状の文様を描く。46は沈線文が区画文に沿って描かれ、縦位の集合沈線が充填される。47、48は隆帯が器面から突出して突起状になる。49は深鉢形土器の胴部文様帶の下端を横位に区画する。内部は沈線文を施す。50は半肉庇状の隆帯と刺突文を横位の隆帯と平行して施す。

51~53は弧状の文様帶をもつ資料である。51は隆帯が渦巻状に貼付され、端部が丸く肥厚して浅い窪みが付される。周囲は三角押文が充填される。勝坂II式であろう。52は同様に隆帯の端部が丸く肥厚し、沈線を1条施す。隆帯の左側縁のみに角押文を施す。53は円形隆帯の側縁に刻みを付けるが、斜状に派生する隆帯

は上部への刻みと変化する。54は隆帯内に渦巻文を施す。

55～59は爪形文が主体となる。55は多段の楕円形横帯文の一部である。鋸歯状の沈線が文様帶を区画する。

56は浅い隆帯に沿って爪形文を重層的に刻む。57は爪形文と三角押文を施す。58は横位の隆帯に沿って爪形文を施す。59は縦位の文様帶が配される。

60、61は隆帯に沿って角押文を施す勝坂II式土器である。

62は口縁部文様帶の下端に隆帯が廻る。区画文内は半裁竹管による集合沈線である。頸部は幅の広い爪形文を並列に施す。63は区画文内に蓮華文を充填する。64は内湾する胴部片で、三叉文を中心とした文様を構成する。65は円筒形を呈する深鉢形形土器で、半肉彫状の文様帶を縦位に展開する。

66～68は三叉文を描く土器である。66は沈線のみで、67、68は爪形文を施す。

69、70は円筒形を呈する深鉢形土器の胴部片である。69は沈線と爪形文、角押文による縦位の文様構成である。70は爪形文の懸垂文が認められ、主文様は沈線により描かれる。71は貼付された隆帯が三又に分かれ人体表現の文様である。72は刻みを有する隆帯の端部が丸く肥厚する。73はC字状のモチーフに正面と上面に刻みを加えた隆帯が貫入する。

74は深鉢形土器の底部である。緩く内湾しながら立ち上がる器形である。胴部の文様は入り組み状の隆帯文で沈線が施され、ここから斜状に交互刺突文の隆帯が派生する。

75、76は底部片で、75には葉脈状の圧痕が残る。

77～80は浅鉢形土器である。77、78は無文で器面は滑沢を帶びる。77頸部が強く屈曲する。78は小型の器體で口縁部が内屈する。79、80は隆帯により口縁部文様帶を描出す。いずれも口唇部から懸垂文が垂下し頸部の隆帯と結節する。

81は阿玉台II式の深鉢形土器に付く扇状の把手である。二又の波頂部からそれぞれ隆帯が垂下する。文様帶の内部には2列の有節沈線文を施す。82は山形の突起で、窪みを加えた隆帯が波頂部から垂下する。周縁あるいは隆帯に沿って角押文を施す。83は胴部に橋状突起を貼付する。突起の結節点から横位の区画文に変化し、内部には斜行に施された複数列の有節沈線文を描く。

84は平口縁の深鉢形土器である。口縁部の屈曲部に襞状の突起が付く。

85、86は阿玉台Ib式の土器である。85は襞状の隆帯に角押文を施す。86は口縁部に沿って角押文を描く。87、88は阿玉台II式の口縁部片である。87は口唇部に2列の有節沈線文を施し、丸い小突起が付く。口唇部から派生した隆帯はY字状を呈し、楕円形の区画文に変化する。内部は有節沈線文と鋸歯状の沈線文が施される。88は波状口縁を呈する。口唇部から隆帯が垂下して2列の角押文をこの隆帯に沿って施し、区画文内は複数の鋸歯状沈線文を描く。

89は隆帯に沿って爪形文を複数列施す。阿玉台III式である。

90、91は阿玉台Ib式の土器である。90は断面三角形の隆帯に沿って角押文を施す。91は隆帯に沿って小波状の沈線を描く。

92はY字状に結節した隆帯の区画文内に複数列の角押文を施す。阿玉台II式である。93、94は浅鉢形土器の屈曲部あると思われる。ともに隆帯に沿って爪形文が施され、内部には鋸歯状の沈線文が描かれる。阿玉台III式である。

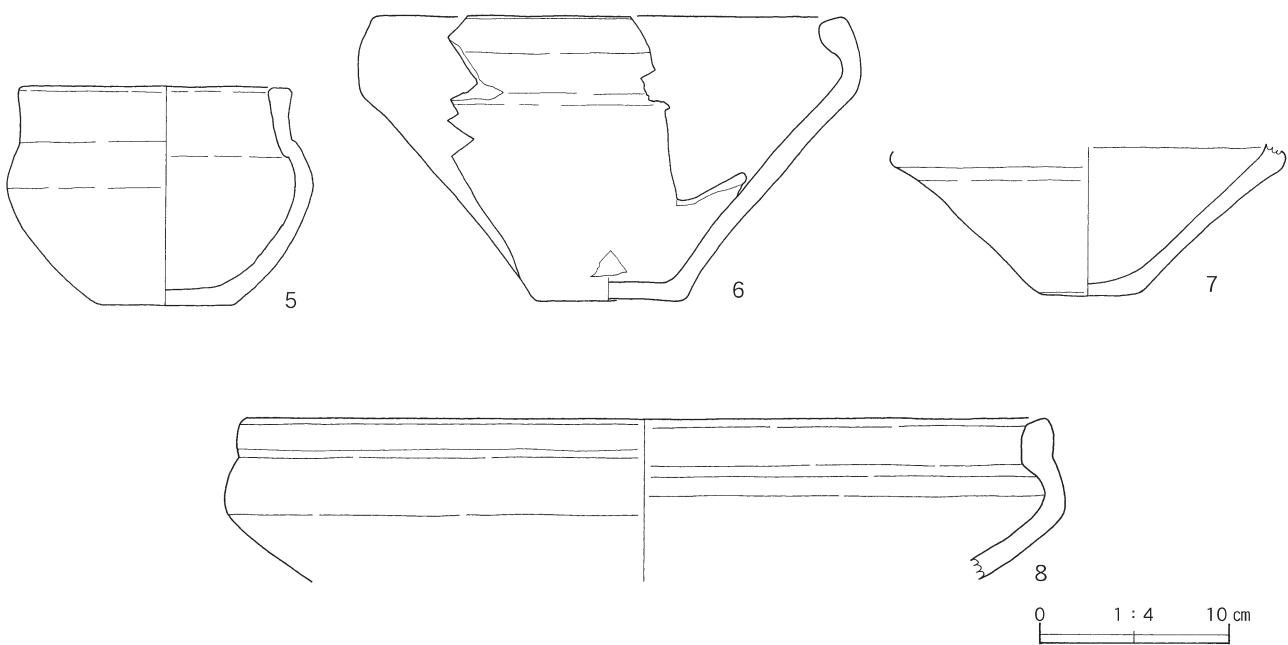
95～98は加曾利E I式の土器である。95は沈線が斜行して施される。96は2本隆帯による渦巻文である。97は頸部の区画文付近の資料である。98は蛇行隆帯と思われる懸垂文が貼付される。

99～103は深鉢形土器の底部である。

104、105は浅鉢形土器の口縁部である。ともに口唇部の断面形は尖銳し、直下には渦巻文が描かれる。



第95図 7号居住跡出土遺物（1）



第96図 7号住居跡出土遺物（2）

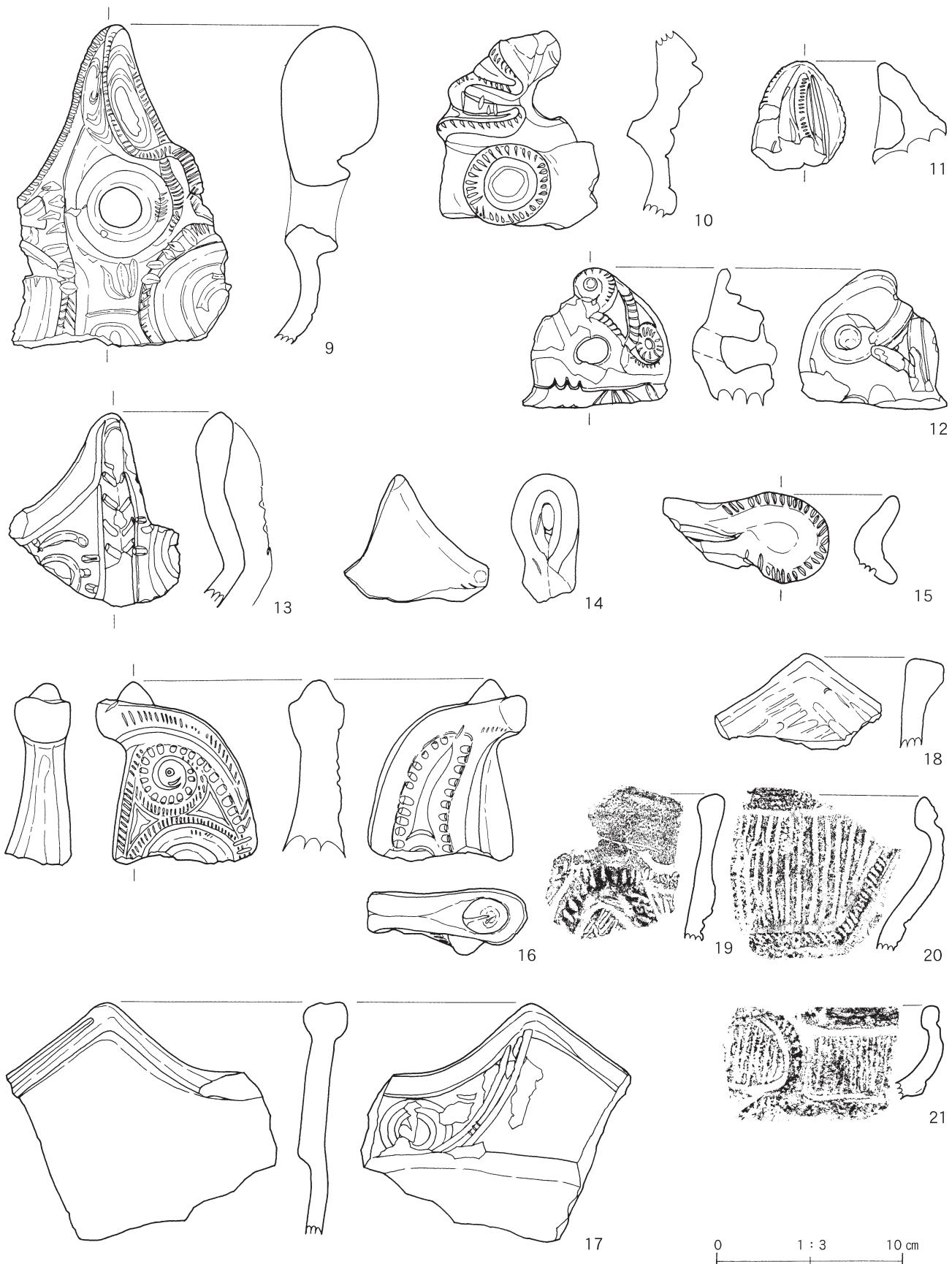
104は隆帯が貼付され、105は半肉彫状である。

106～108は浅鉢形土器である。106は最大径が胴部上半にあり、口縁部は直立する。107は口縁部が内湾する。108は口縁部が内側に肥厚して稜をもつ。

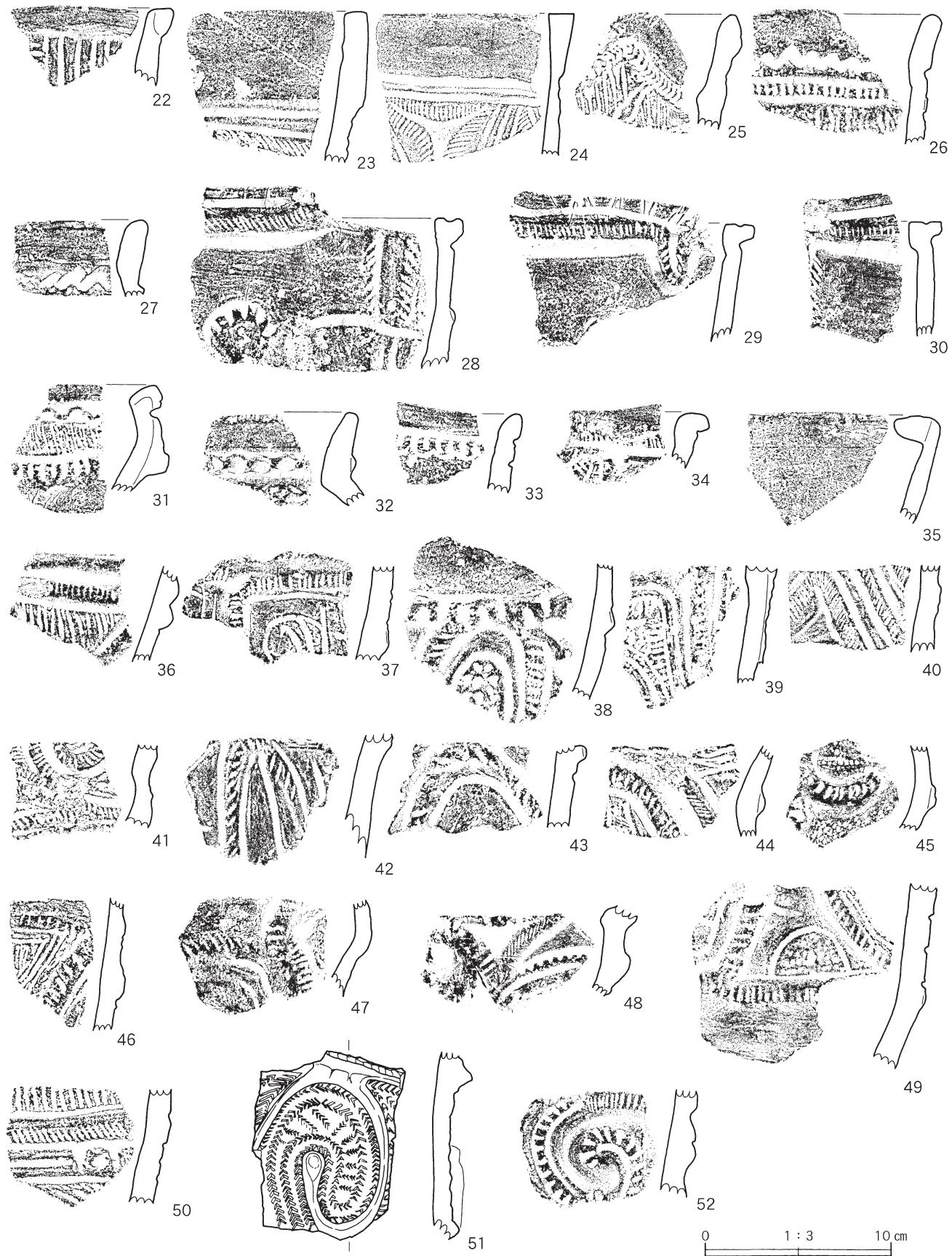
109～111は中峠系の土器である。109は口唇部直下に交互刺突文を廻らせ、地文の撚糸文上に隆帯を貼付する。胴部が内側へ強く屈曲する。110、111は波状口縁を呈する。口唇直下に沈線文と刻みを廻らせ、外面に段をなす。110は波頂部に渦巻文を配する。

112は深鉢形土器である。口唇部には連続した押圧が加えられ、頸部は無文帯となる。胴部とは平行する3条の沈線で区画される。大木8b式に比定される。

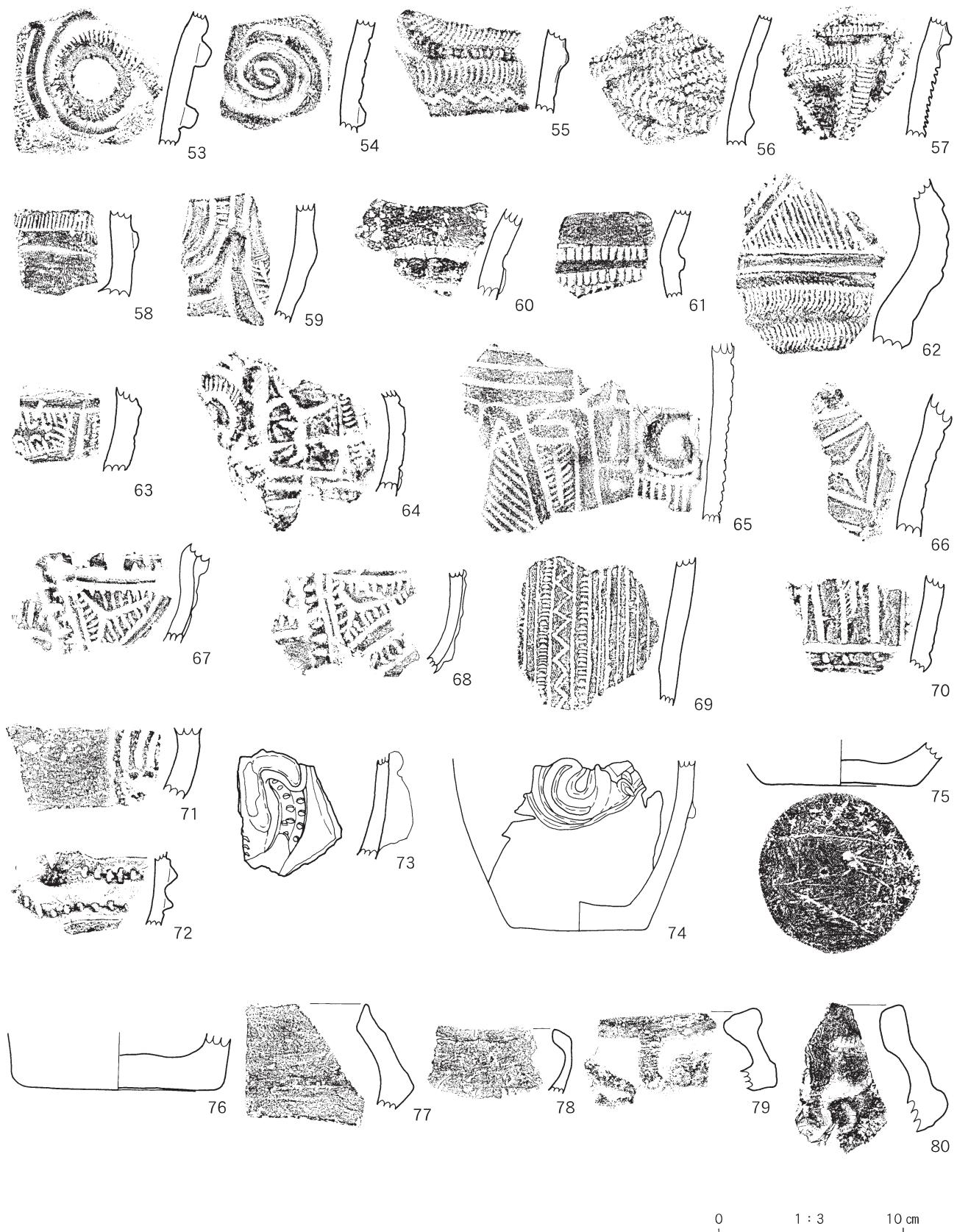
113は早期の井草式と思われる口縁部片である。口唇直下は無文である。114は諸磯c式の土器である。地文上に浮線文を貼付する。115は前期の土器で単節縄文を施文する。



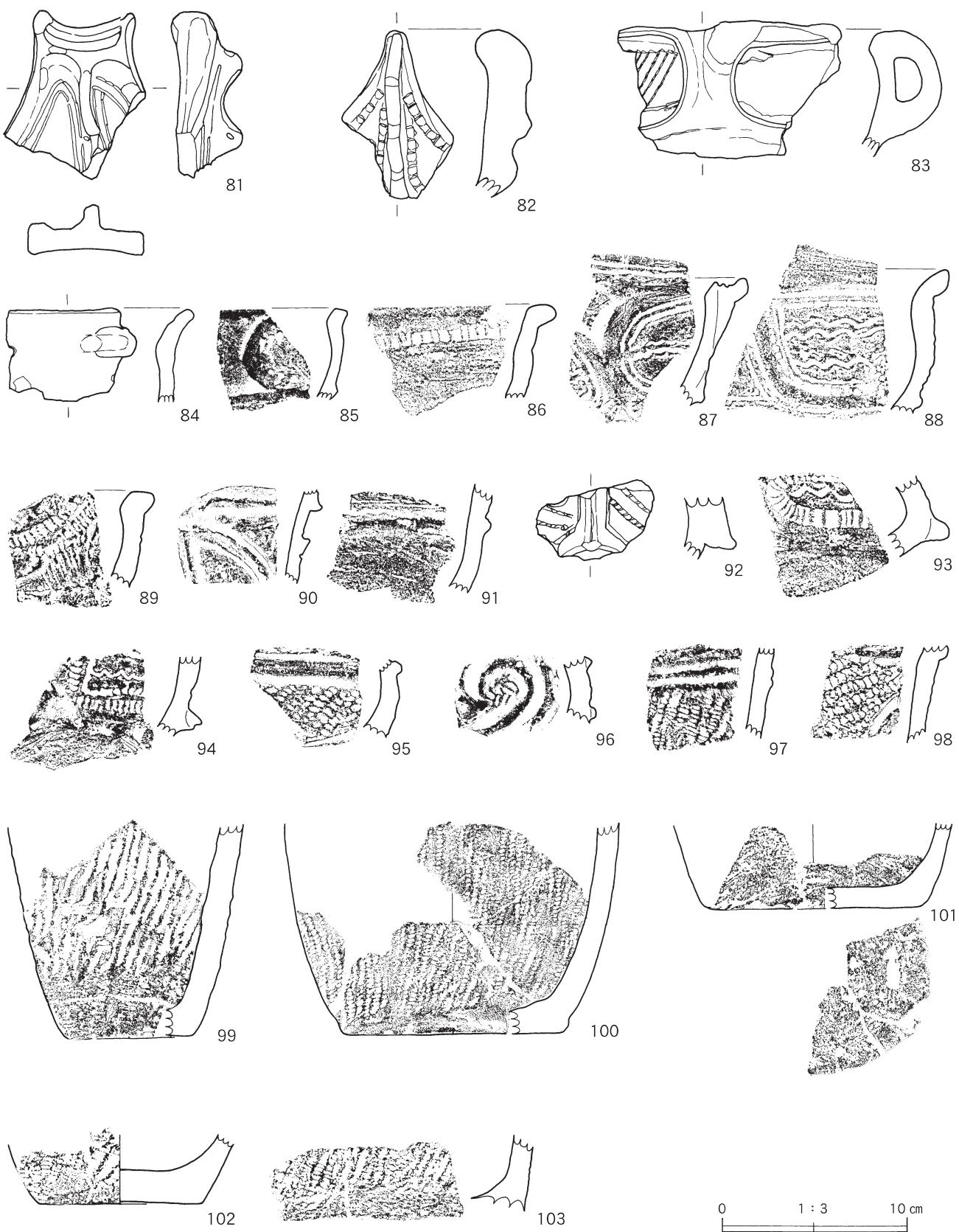
第97図 7号住居跡出土遺物（3）



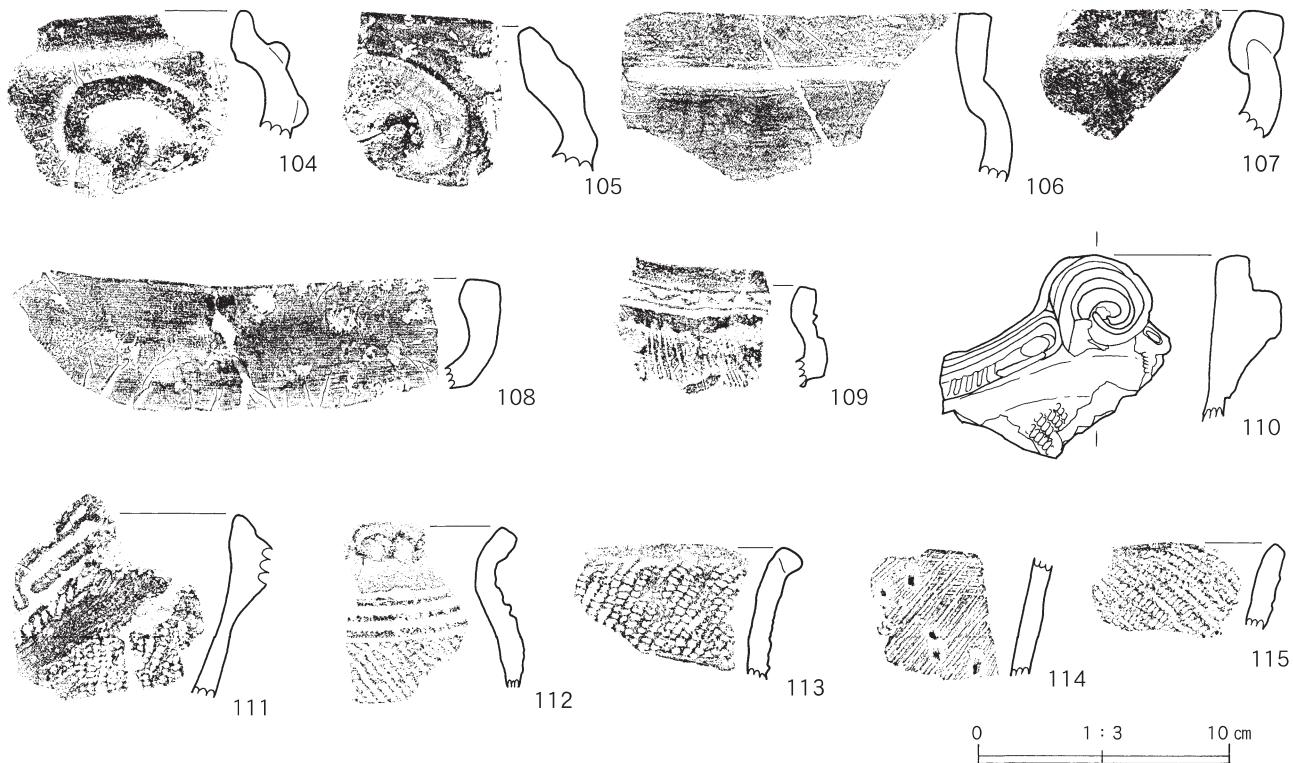
第98図 7号居住跡出土遺物 (4)



第99図 7号住居跡出土遺物（5）



第100図 7号住居跡出土遺物（6）



第101図 7号住居跡出土遺物（7）

8号住居跡（第102・103図、第21表）

本住居跡は、F9 グリッドに位置する。住居跡のプランは楕円形を呈し、長径5.5m、短径4.1m、深さ0.25m の規模である。主軸は N-26°-W を指向する。床面はほぼ平坦で、硬く締まる。壁の立ち上がりは緩やかである。壁溝はなく、覆土は焼土粒子、炭化物粒子を含む茶褐色土を主体とする。

住居は廃絶後の埋没過程における土器の廃棄行為が認められ、特に住居の北東方向からの投棄された状況が観察された。

炉跡は2基が確認され、ともに土器片を掘り方に沿って並べる土器囲い炉である。1号炉跡は住居跡の北寄りに確認され、その規模は長径110cm、短径100cm、深さ25cmを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土は焼土ブロックの堆積層である赤褐色土を主体とする。また2号炉跡は住居跡のほぼ中央部で検出され、長径80cm、短径80cm、深さ40cmを測る。平面形は概ね円形を呈する。覆土は焼土ブロックを多く含む黒褐色土が主体である。主軸はともに N-18°-E を指向する。

床面からはピットが12基検出されており、このうち主柱穴と考えられるものはP1～P6が想定され、南側のP1付近が入口と考えられる。それぞれの深さはP1-46.8cm、P2-54.8cm、P3-41.5cm、P4-77.8cm、P5-54.0cm、P6-61.0cmである。

炉跡を構築していた土器群が曾利II式及び加曾利E I式であり、住居跡の帰属は加曾利E I式期であると考えられる。

第21表 8号住居跡柱穴計測表

(単位cm)

	長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ		長径	深さ
P1	40.0	46.8	P4	46.0	77.8	P7	41.0	52.0	P10	28.0	51.0
P2	42.0	54.8	P5	45.0	54.0	P8	35.0	41.3	P11	39.0	62.7
P3	51.0	41.5	P6	66.0	61.0	P9	38.0	45.7	P12	27.0	37.2

8号住居跡出土土器（第104～108図）

1は1号炉跡に使われていた土器で、曾利Ⅱ式である。胴部は大きく内湾し、頸部で強く外反する。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口唇部は内側へ突出する。口縁部は無文帶であり頸部には横位の蛇行隆帯が貼付される。胴部文様帶はRLの単節縄文で蛇行沈線と平行沈線が懸垂文として交互に施文される。復元口径は29.0cm、残存高は21.5cmである。胎土には片岩の細礫、砂粒が多く含まれ、色調は内外面とも暗褐色である。焼成は良好である。

2は2号炉跡の構築材として使用された土器である。加曾利E I式の古段階に帰属する。胴部上半から口縁部まで復元された。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。口縁部文様帶は2本の横位の隆帯間にLRの単節縄文を地文として施し、下端の隆帯から6単位の渦巻文を派生させて区画文とする。頸部は広い無文帶で、胴部とは横位の隆帯で区画される。復元口径は34.5cm、残存高は15.5cmである。胎土には片岩の細礫を多く含む。色調は内外面とも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

3は浅鉢形土器である。無文で最大径を胴部上半にもつ、口縁部は肥厚して直立する。内外面ともに横位のミガキがよく施される。復元口径は34.5cm、残存高は11.0cmである。胎土には細礫、砂粒を含む。色調は内外面ともに茶褐色で焼成は良好である。

4はいわゆる「多喜窪タイプ」と言われる深鉢形土器の筒状の把手である。中央の懸垂文は刻みと交互短沈線が施され、隆帯が並走して垂下し、両側面に沈線による渦巻文が描かれる。5は山形状の突起で中空である。左右に貫通孔を設けるが左右対称ではない。波頂部に小渦巻文を施す。6は山形状の突起である。波頂部から隆帯が垂下して橋状の把手が配される。7は山形状の突起で全体に肥厚する。波頂部から矢羽状の刻みを有する隆帯が垂下し、途中で蛇行する。

8、9は波状口縁の頂部で、内湾する器形である。口唇直下に丸く肥厚した隆帯から、連続した窪みを施す懸垂文が派生する。9は隆帯に綾杉状の角押文を施す。

10は波状口縁を呈する。口唇部直下に橋状の把手が付けられ、内面に隆帯が横位に廻る。

11は半円状の突起部である。2重の沈線により囲まれた中央部が外側に突出して集合沈線を施す。

12は隆帯による楕円形区画文が横位に連続する。内部に集合沈線を充填する。

13は隆帶上にRLの単節縄文が施され、鎖状の隆帯が横位に廻る。14は円筒形の深鉢形土器である。口縁部は広い無文帶であるが、胴部からの隆帯が一部に貫入する。

15は楕円形区画文が連続する横帶文の一部である。刻みと交互の短沈線による隆帯を配する。16は縦位の隆帯が垂下し、右側のみに沈線を沿わせ、横位の粗い集合地線を施す。

17～20は弧状の隆帯により文様を描く。17は円形に爪形文を配す。18は突出した隆帯に刻みを加える。内部は蓮華文を配する。19は器面の外側へ大きく突出した楕円形の区画文で、太い短沈線を交互に施す。20は円形隆帯から刻みを有する隆帯が派生する。

21は外反する口縁部の屈曲部に蓮華文を配する。

22は浅鉢形土器の屈曲部である。23も浅鉢形土器である。胴部は無文であり、屈曲部には刻みをもつ隆帯が貼付される。口縁部文様帶は沈線による楕円形区画文を描く。

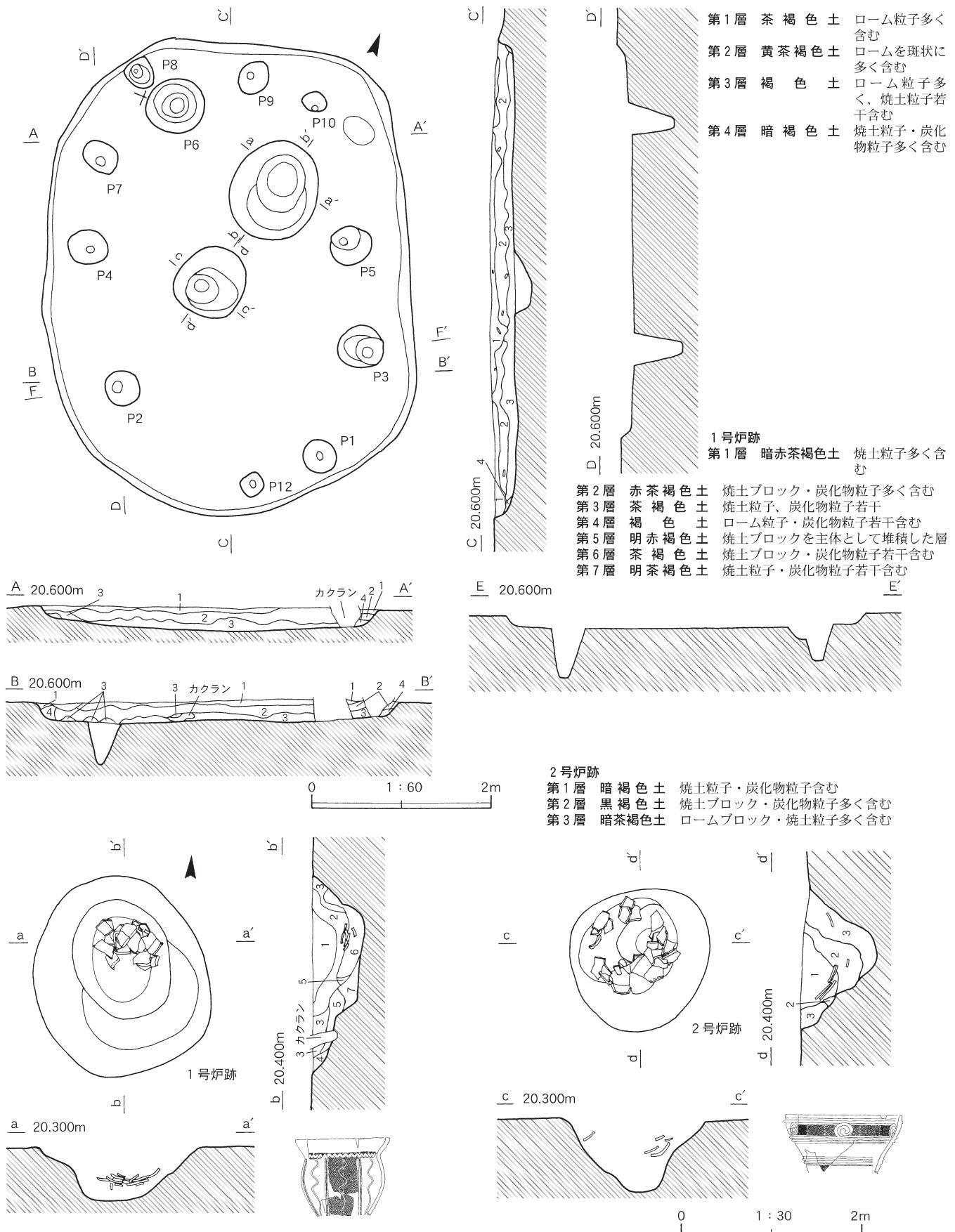
24は頂部にU字状の窪みをもつ阿玉台Ⅱ式の突起である。複数の有節沈線文による弧状のモチーフを描く。25は阿玉台I b式の扇状把手である。右側縁から隆帯が垂下し、S字状の懸垂文になると想定される。

26、27は阿玉台Ⅱ式の土器である。角押文による文様を描く。27は補修孔を外から内へ開けている。

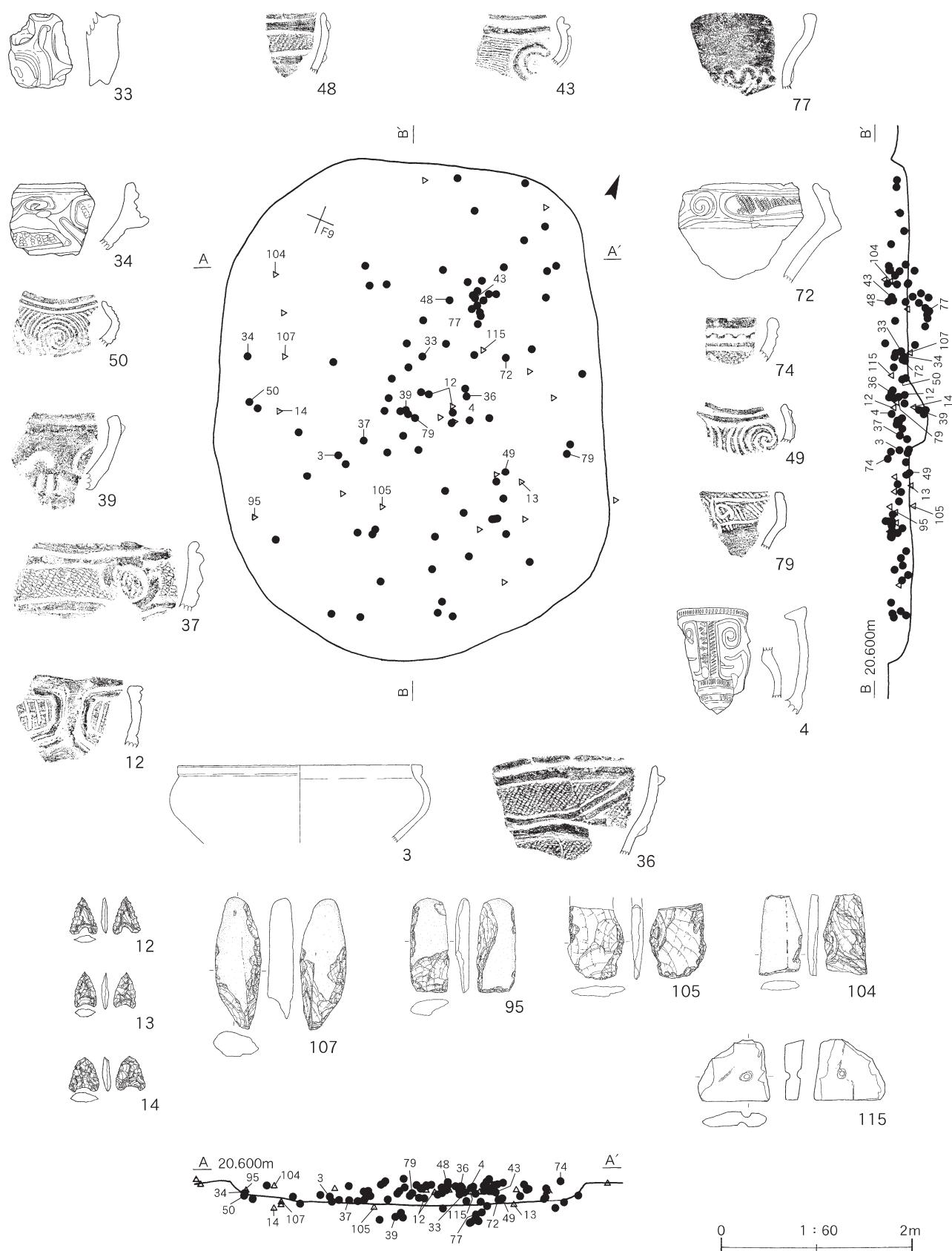
28は円筒形を呈する深鉢形土器である。縦位の隆帯には綾杉状の刻みを施す。勝坂Ⅲ式である。

29～32は阿玉台Ⅱ式の土器である。29は2列の角押文を隆帯に沿って施す。31は鱗状の突起が胴部に付く。

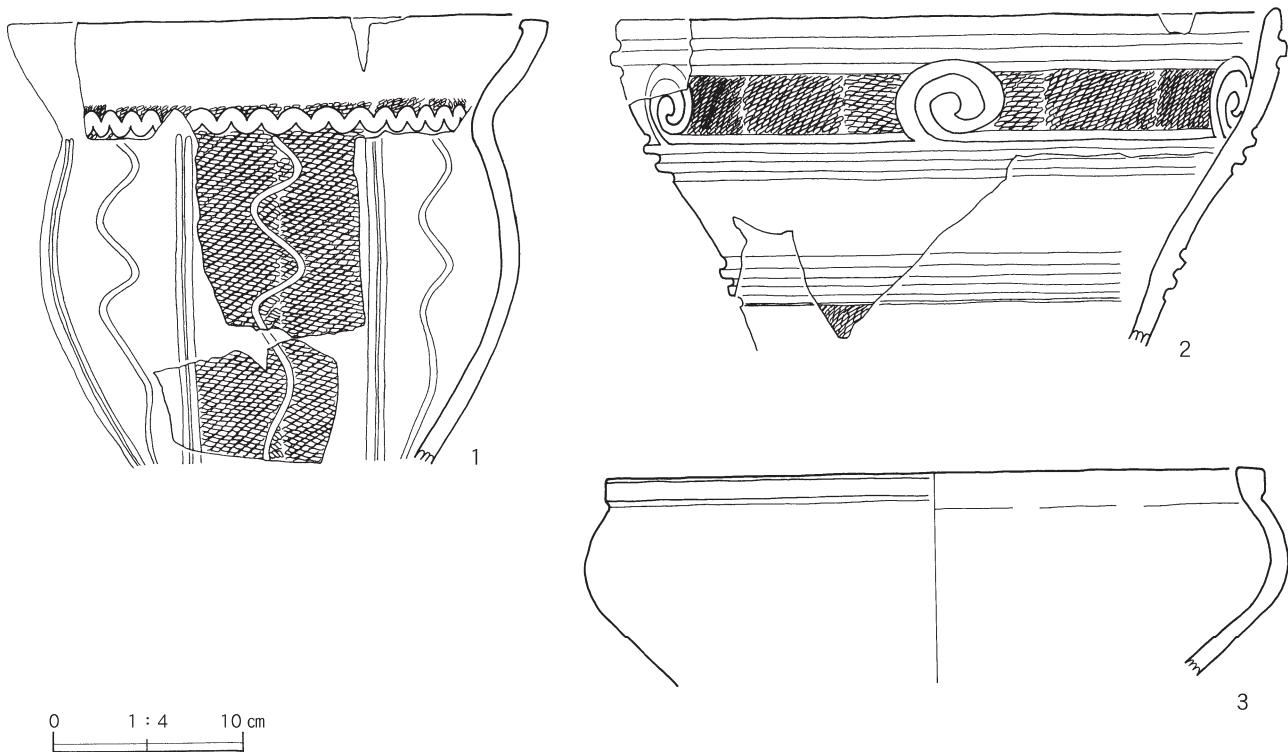
第3節 第2次調査の遺構と遺物



第102図 8号住居跡



第103図 8号住居跡遺物出土状況



第104図 8号住居跡出土遺物（1）

33は加曾利E I式の深鉢形土器の突起部である。口縁部文様帯から隆帯を派生させ、口唇部へ突出させる。貫通孔を有し、頂部には窪みを配する。

34～48はキャリバー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。34、35は隆帯によるモチーフの結節点に渦巻文を配する繋ぎ弧文である。34は頸部に文様帯をもつ。36は2本隆帯による弧状のモチーフを描く。頸部には口縁部から連続する地文を施し、蛇行沈線による懸垂文を配する。37は口縁部文様帯を隆帯で描き、渦巻文を配して区画文とする。38は口唇直下に太い沈線が廻る。39、40は地文をもたない土器である。39は沈線の端部に小渦巻文を描き、口縁部文様帯とは縦位の短隆帯で繋いでいる。41～48は口縁部文様帯に2本隆帯によるモチーフを描く。41は口縁部文様帯を隆帯が平行に区切り、クランク状に変化するようである。42、43は渦巻文を描く。44は波状口縁である。45は横S字状文が展開すると想定される。46は隆帯に刻みを施す。47は縦位の隆帯が文様帯を区画する。48は頸部に無文帯を有する。

49～51は密な沈線により渦巻文を描く土器で、いずれも波状口縁を呈する。51は円錐状の突起となる。

52は幅の広い隆帯により文様を構成する。楕円形区画文内は粗い単節縄文を施し、沈線により小渦巻文が描かれる。

53、54は口縁部片である。楕円形区画文は隆帯に沿って沈線を施す。

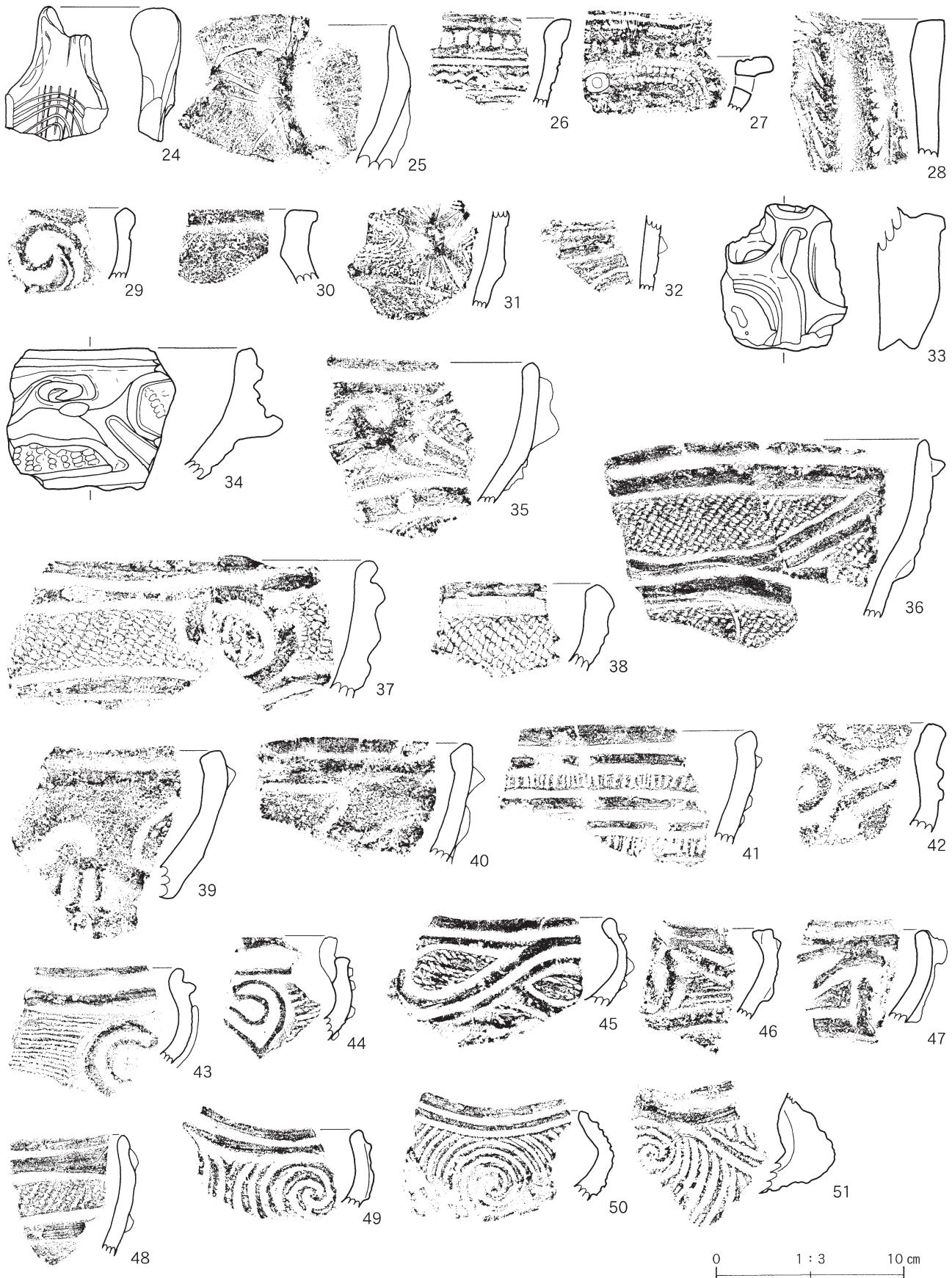
55、56は頸部無文帯付近の破片である。55は頸部がやや肥厚して稜をつくる。短隆帯が縦位に貼付される。56は胴部文様帯との区画に平行する隆帯が廻る。

57～64は胴部文様帯の懸垂文を一括した。57は蛇行隆帯と平行する隆帯が交互に描かれる。58～61は隆帯による直線状の懸垂文である。62～64は蛇行隆帯による懸垂文である。64は胴部が膨らむ器形で、鎖状隆帯が横位に廻る。

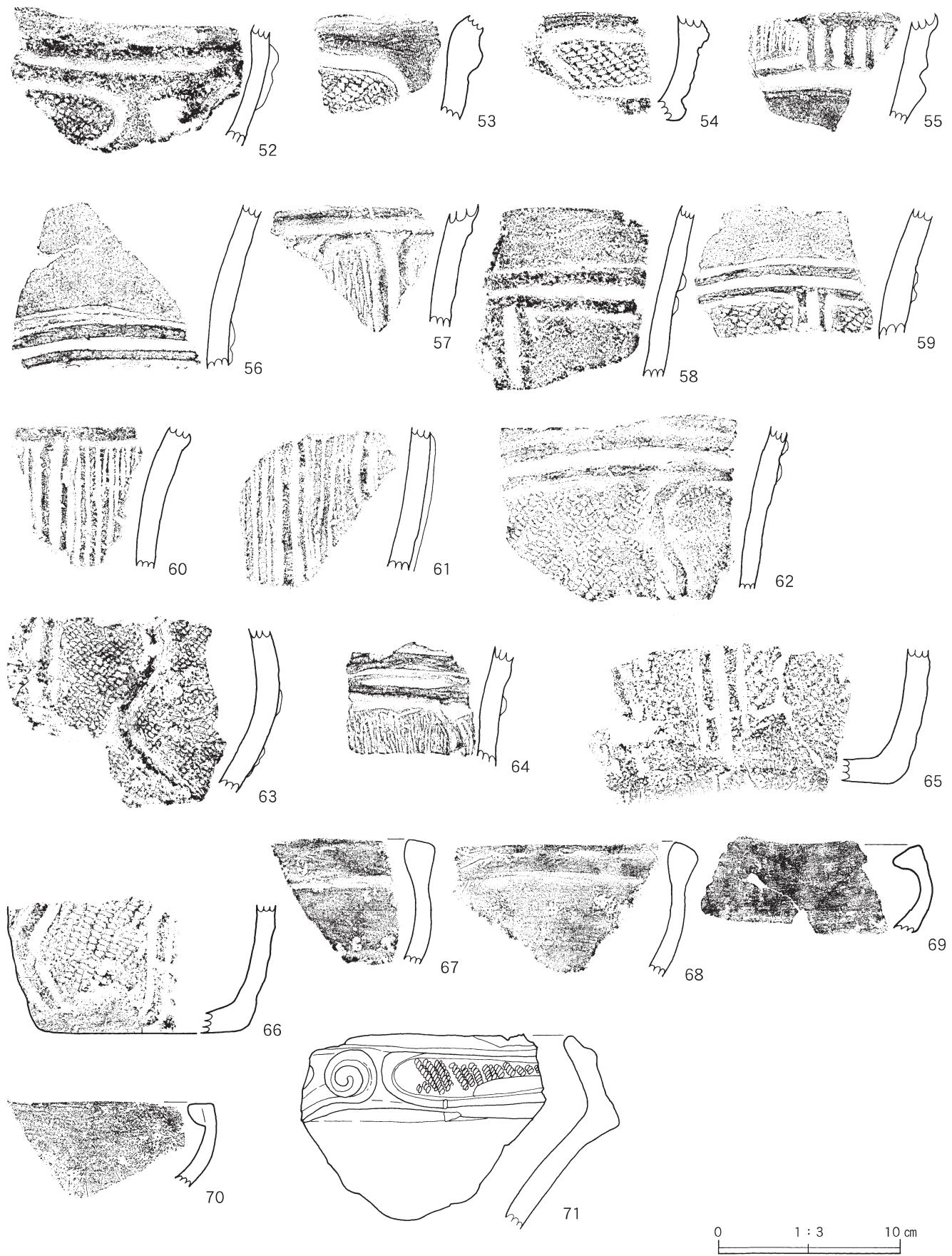
65、66は深鉢形土器の底部である。いずれも直線的に立ち上がる器形で、地文は単節縄文が施される。



第105図 8号住居跡出土遺物（2）



第106図 8号住居跡出土遺物（3）



第107図 8号住居跡出土遺物（4）

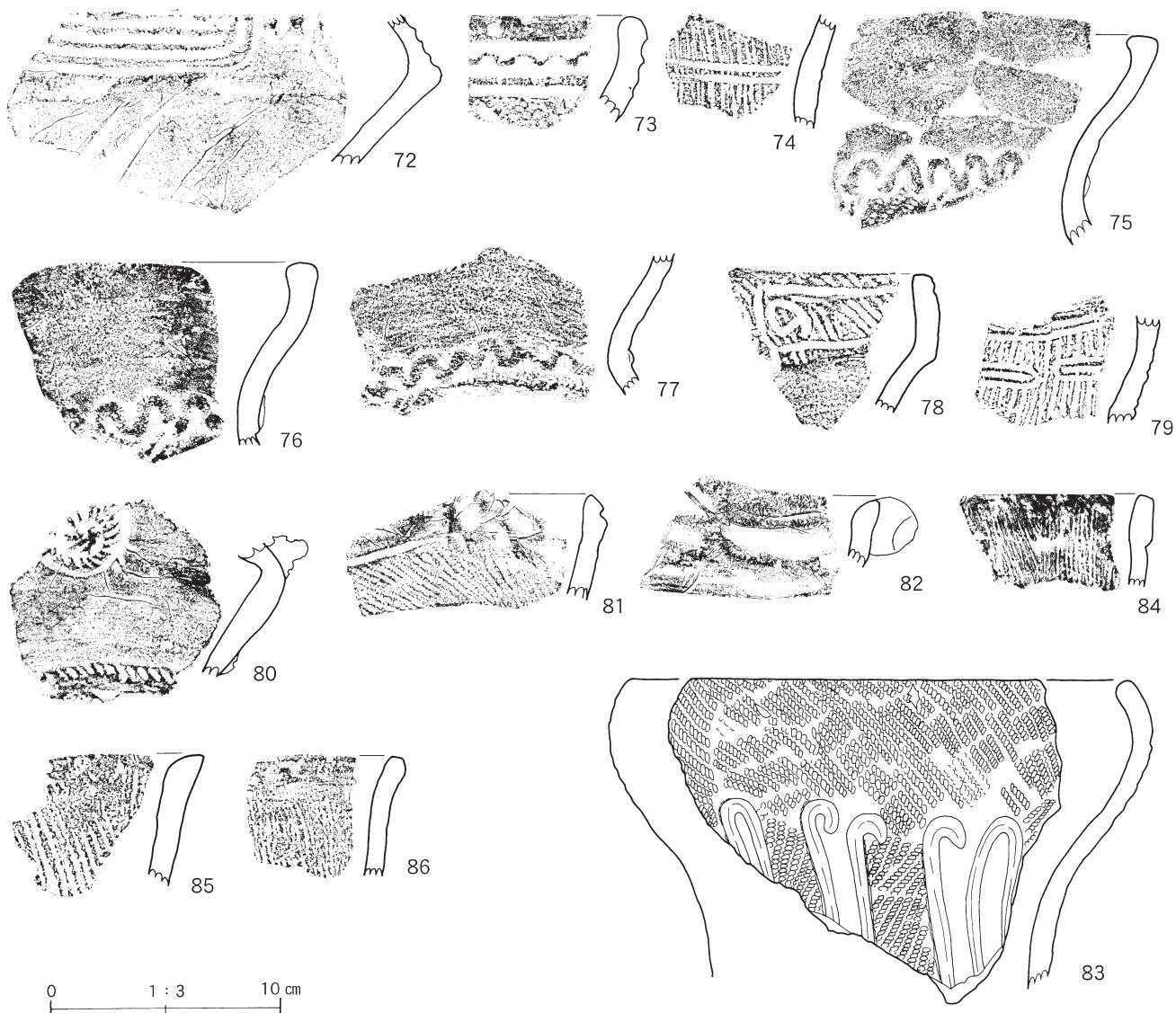
67～70は浅鉢形土器である。67、68は口縁部が矩形に肥厚し、胴部上半が最大径となる器形である。69、70は口唇部が内側に突出する。

71、72は浅鉢形土器である。71は胴部はやや外反するように立ち上がり、頸部で内側に屈曲して直線状に口唇部へ達する。隆帯による楕円形区画文と渦巻文を描く。渦巻文直下は隆帯の一部が飛び出して突起状である。72は口縁部文様帶が隆帯によって構成され、方形の区画文を描く。屈曲部は太い隆帯が貼付され、胴部の無文帯とを区画する。

73、74は連弧文土器である。73は口唇部直下に交互刺突文と沈線を平行して廻らせる。74は胴部の括れ部で平行沈線が施される。

75～77は曾利系の土器である。いずれも深鉢形土器で口縁部に広い無文帯を有し、胴部との屈曲部に蛇行隆帯を貼付する。

78は中峠系の深鉢形土器である。地文はRLの短節縄文で、この上に沈線による楕円形区画文を描き渦巻



第108図 8号住居跡出土遺物（5）